

藝州
嚴島圖會

卷之一

共十本
五十四

內務省圖書
第一〇二一三號
和書部地理類
第二卷
共十冊

和書門
二九〇七
一〇一四二
類號函架冊

187
內閣文庫
和書類
二九〇七
一〇一四二
冊架函架

內閣文庫	
番號	和 2907
冊數	10 (1)
函號	175 187



教部
文庫

印

文庫

文庫

安芸の國伊都波
大和人の世と成
此等より天降
海へ上
天降日嗣
然ちり下
國の内
ちり
を



神庫藏

嚴新圖會



我朝之制國風時不
變也其所以為
新法也其所以
為舊法也其所以
為中法也其所以
為西法也其所以
為東法也其所以
為南法也其所以
為北法也其所以

五柳司
君之
國民
常
守
心
志
人
物

孝之海心一石上串
朝之婦之也之九
と世の子孫を母
乃羽子も法もた
河の鳥を記久
傳人若干姓書

あは一麻呂子孫書
孝之海心一石上串
孝之海心一石上串
孝之海心一石上串
孝之海心一石上串
孝之海心一石上串

中南海の北にありて
この実なる一言を
かくし地書の証を
海に流し只の御代
に傳ふとていふ

洪いん

天保し未孟春

久我前内大臣源通明公

慎思齋主人書

敬告會所

嚴島面會序

ことふこと六十あまり結るものうち一。花のたもと
しうた山。月のこうき。き海。水。みの。は。き。原。野。
る。う。る。結。る。や。ら。た。次。神。の。み。い。づ。の。う。こ。た
社。佛。の。ち。い。の。も。ふ。と。た。寺。い。は。い。う。あ。る。や。
こ。社。を。世。の。う。た。う。ゆ。た。ま。る。る。や。目。の。こ。め。と。ま。ら。ぬ。
足。の。い。も。う。ぬ。さ。う。い。う。も。う。ま。あ。う。ぬ。結。う。い。い。ま

い。ま。あ。る。や。お。も。う。た。お。も。う。た。お。も。う。た。お。も。う。た。お。も。う。た。
ぬ。う。の。あ。い。を。や。う。た。人。の。為。め。と。今。い。は。し。
天。の。實。政。の。う。後。玉。敷。の。都。結。名。た。う。り。う。結。
あ。つ。ま。ち。の。う。も。枕。を。た。た。ひ。ら。く。葉。葉。面。あ。る。
さ。う。ま。う。つ。結。あ。ま。あ。め。と。ち。巻。を。つ。ら。う。結。あ。る。
より。大。和。河。内。き。結。ら。ま。う。また。あ。つ。た。い。い。と。た。
う。結。草。の。枕。結。つ。中。拂。ふ。い。も。う。た。も。た。う。と。た。

りぬる跡のあり秋きつぎしかり。うたを桑の波結
いふとれたるしよなとて。ふ尋の産のみる糸を糸
かきかきとてありぬきとて。いまも西の海まで。これよ
いふうの秋。安藤のふ人宮崎之意。うたを糸かき
しおきして。嚴島の番倉つらうまわ。これ志のありよ
一城。これふ。この殿人岡田清。うたを糸かき。清。い
とえう。なひて。うたのふ。秋。うん。今の秋。糸
かき

たを探り。いつまき秋書ふあり。うたを糸かき。な
たを。うたを。糸かき。うたを。糸かき。うたを。糸かき。
が。糸かき。この書。うたを。糸かき。うたを。糸かき。
糸かき。うたを。糸かき。うたを。糸かき。うたを。糸かき。
糸かき。清。も。之。意。も。う。糸かき。う。糸かき。う。糸かき。う。
糸かき。う。糸かき。う。糸かき。う。糸かき。う。糸かき。う。
申らひあり。糸かき。う。糸かき。う。糸かき。う。糸かき。う。

たきこま事な久あ事ありて故。

と保七と留とふとと結霜月

田中芳格

伊都岐島國會序

百たらの浪いづふ志ま根よ。志ぶまの海流

ある。こころの如大神ハ一も。いんましくも

穴よかへま天津神祖の帝子達りし高。

大神名を石上古より代にの國籍りもつち

ち返く帝徳を久方の天の照りと旅さるえは

さかえ海して不かき入天下りある。玉運二と

ちの記名不なんある。かふるめをたき。大宮ふたりの

えりる地コ、チ事なりよ。いざぬ地書コ、チ々々のり。
千里チ、リの外オ、ホ四方シ、ホウの境サカイよ。ゆふいりて人とぬ人の
よそみえ。あぬ大神の大神を海ゆゑをしきる。
至つかり海ゆきん結ちしをも。なりあんかし。
天保テン、ポウいしとふ年十月 畠田清

Faint handwritten text, likely bleed-through or a separate entry.

凡例

嚴島イツシマの巖雨イワンきる小島コシマなりといへども本社ホンシヤの壯麗サウレイより始オチる
名區佳境メイクウの於オに山サン水スイ風光フウクワウの優ユウなる位レイに比類ヒライなき處トコロ
をさくあることなし。故ユエに今イマこの書シヨ成ア編ヒめて凡島オホシマの肉ニク骨ホネ
ること鎖サ細サイも漏モラさけ真景マケイを写ウツして畫ヱを設セツけ實録ジツロクを
考カウへて事コトを記キし看官カンカンをして眼ガン前ゼン不フ瞭リョウ然ゼンもさしむ
草創ソウソウより以來ココノト有セン餘年ヨネンの鳥兔ウサギを經ヘて時世トセの盛衰セイソウ小志
もぐひ或アル祝融イフユウの災サイ小荒蕪コウワウ或アル兵亂ヘイランの害ガイ小移コシ変ヘンせる
もの多オホし然シカまじもさ次ツギが小海コウカイ中チュウ小屹コキ立リツとて陸地リクヂを依ヨりよ
隔ヘたりきれを於オにづらう災サイ害ガイ成ア適トクきて松マツ革カクを知チらざるも
のもさしなぬかみあはぬ畫ヱを按アへて説セツぶべし
畫中間ヱチュウカン人物ニヒツブツの大畫オホヱを出イせるが中チュウ小コ怪談クワイダン奇話キカワなり

まゝもあらず祢どきな古書小徴一巻にば妄なりといふべからず
堂あり大經堂の櫓樟の故子の如きの疑一巻に似たきども
里老の口碑既久一いつて強ち捨べき故に載せし見
童の欠伸を慰ま

島外といへども地清前速田社大頭社官幣社誓願寺
田所氏などのごとて由緒あるかまりの悉く載たり

畫畵いみな姓名印章を載てその人をあらしむり姓名
印章なれたる峻峯齋守嗣の筆のとなり

島内諸社の祭祀及禱祀の故事などを巻五の年中
行ふと題して別小巻たり地清前以下島外の例祭ハ

社々の部下小記を
又倉小藏の宝物の別小畵して五冊なる後篇

とせり

郷小道芝記の作ありといへども畫畵少なきがゆゑ小実
地を履さる人其事免小眼を悦びむる至るは涉獵た
るはらばゆゑ事跡を索る人の為小益あることな
こはようて此度の拳ハ日本紀古事記等の古書を
更ふもいそ次野史牌官のいさまで勉免て攝となる
ことハ本文をその後子載を聊かも私意の添削を加
へざるものなり

この書編集のち、年より故實の正誤をたし、是非の添削
をくそへつるものハ幸藩の頼惟柔加藤景續周防の田中芳樹
なり

平相國清盛公書

一區據孤洲之巖
薛四面臨巨海之
渺茫

嚴島圖會卷之壹

同録

本社 寶殿 幣殿 三棟拜殿

客神社 寶殿 幣殿 三棟拜殿

高舞臺

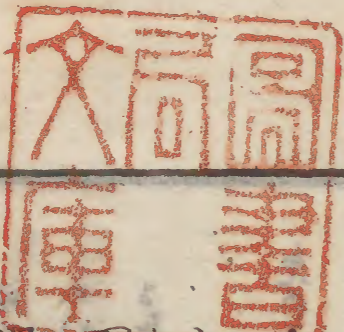
廊嘴

圓橋

湯立殿 能舞臺

大鳥居 同額 繪馬

社家供僧内侍社役人職名



同合殿

神階

樂屋

天滿宮

瑞籬

鐘樓

社頭修理

神領

門客神社

廻廊

御供所

文庫

攝社末社

嚴島圖會

いづくまぎんつねもて
巖島全圖表一

安藤のくま人未田
 芦磨がもとよりかの
 園のいつくまの面
 のいとほしくうねこ
 るをたぐりてをきて

幸辰宜長

免のふよ見れ

そちていつねま

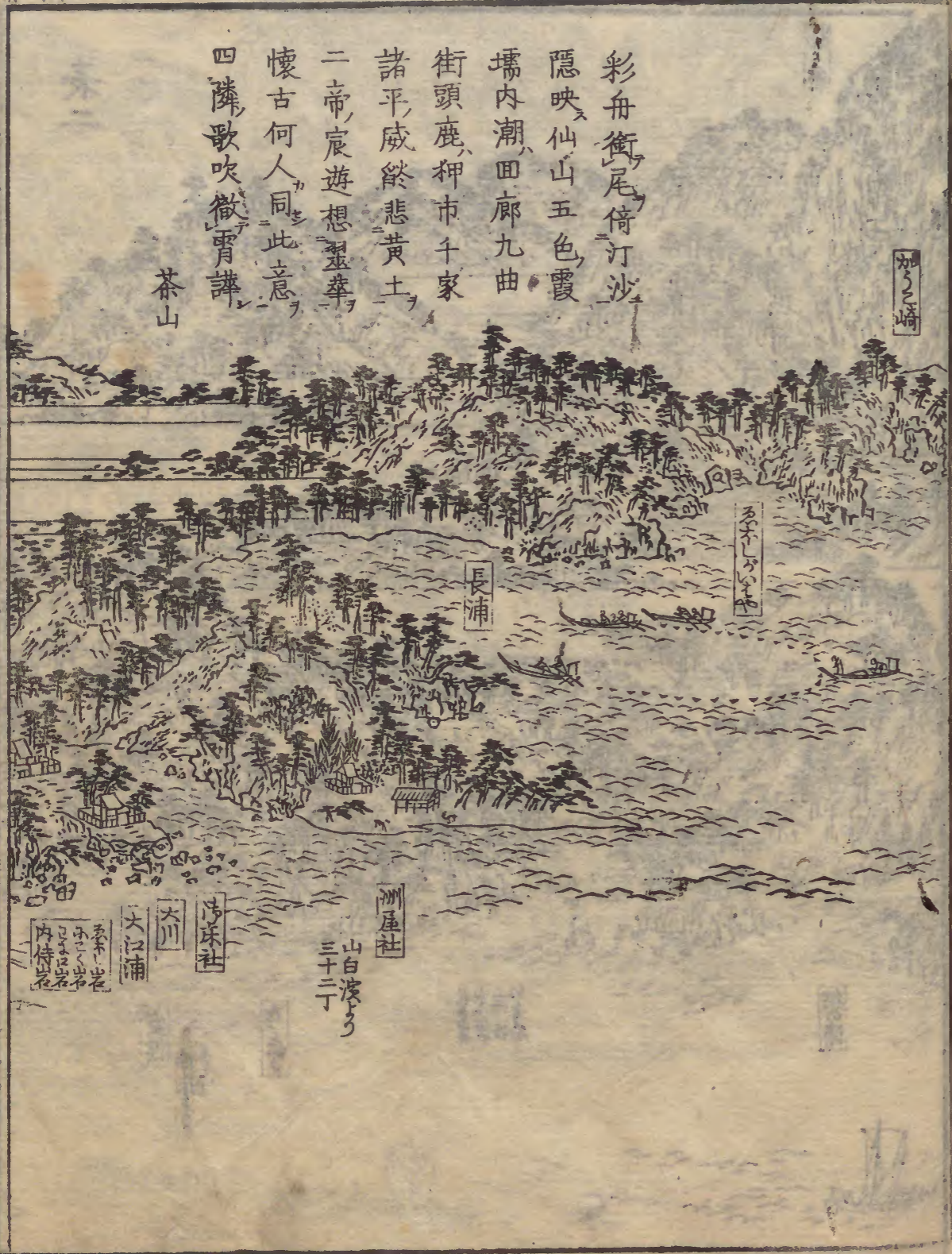
いつまぬんと

たごるうし繪



彩舟街尾倚汀沙
 隠映仙山五色霞
 塙内潮田廊九曲
 街頭鹿押市千家
 諸平威終悲黄土
 二帝宸遊想翠華
 懷古何人同此意
 四隣歌吹徹霄譁

茶山





表三

題嚴島真景

為菟府賴文與子

黃玉表浸碧海浪。金

榜。御題射蒼宮。君

不見神人鋸斷須弥

竿。移而置之蓬萊東。

變幻萬狀搖未定。翩若

彩雲泛春空中。樓靈妃



市杵姫。紫貝之關水晶宮。

君臣遭遇其取掌。香花奔顛

傾萬衆。余亦乘夢掌。一到珊瑚宝

鞭策白龍。僊鹿神鴉相後先。延余飛

度百尺虹。響屨廊驚迷初覺。百八珠燈

波底紅。寅夜始達瑤階下。仰歎大闢問

控々凶逆不臣。平相國。義弘元就底蟻

蠟。不知神明何所眷。福祐擁護如許隆

余有神策萬餘言。一言而可以興邦。東說

西說。舌已爛。君相不省。徒如龍。哀朽寒

餓非所顧。報國思効。消埃忠。聰明正直

如不昧。回首一為照丹衷。銀纏長刀今

安在。何惜暫時借。禿翁哀。歡十聲寂

不答。恍然骨慄。朦朧中。賴家真面誰。處

得。一々與夢。所見同。對之猶疑魂未返。如聞

空樂。晨曉風

柴邦彦



表四

神山縹渺小蓬萊
七浦風烟與海開
今古精禪無廢馳
闕宮時進紫霞杯

寺田臨川

江甲島



小蓬萊

小蓬萊

屏風浦

長濱子



仁島

聖崎

真一



裏一







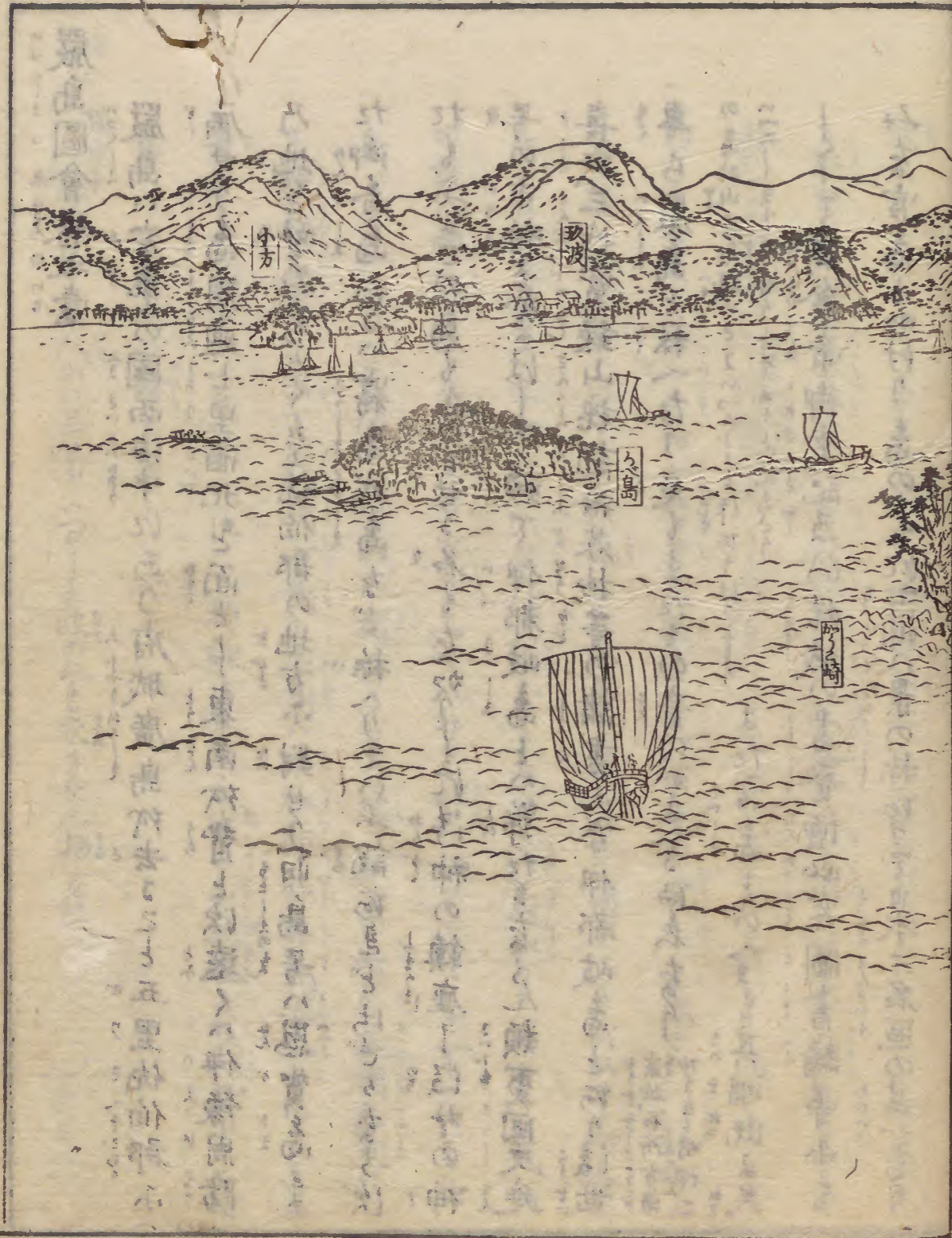
登彌山
 雖愛雲光薄
 尚知嵐氣遠
 穿林觀瀑水
 度嶺遇磨廢
 松偃堪為棧
 巖懸自作家
 樵童華表外
 拍手喚神鴉
 賴春水

泉



裏

永園持堂
 三鬼神
 三好尾
 天兔峯
 猫ヶ谷
 かの石
 かの木浦
 かの木浦
 大さり浦
 雁細浦社
 山伏床
 かの石



嚴島圖會卷之壹

嚴島の安藝の國西海中にあり府城廣島に去ること五里佐伯郡小
廣せり島周廻七里西北を面と一東南に背と次遠くハ伊豫周防
乃地を望みちらくそ佐伯郡の地方小對せり旧島号ハ恩賀島ま
た御番島あるハ霧島我島など稱へりといふ説阿比岐とほごりたのり次
れもふまこの島もといさせろ名もなかり一に淨神の鎮座一後世の神
号の市村とかよはし一頃て伊都岐島とい稱たるちらん類聚國史延
喜式三代實録山槐記拾芥抄等の諸書に伊都岐島といり後世
専ら嚴島と稱へたり是もまたその音のかよへるゆゑなり
の島北山をみ磯のさよといつこりと作ありけりまより
いつこりと号せりとせよと云ふなり
また宮島といへるも其唱既久
くして高倉帝御幸記及び珠域の書登壇必究圖書編等亦も
みな宮島とかけり島のうちに七浦八景の稱ありて日本三名區の其一なり

按ふ上件ふいぐる恩賀島また御香島我島霧島などの説更小正史小見
る起なり但道芝記小二首の歌引て入海の八十浦かけて十島なる中に
香ののれ島ハ七浦恩賀一またそがごとそ井のづらよとたがしはとらり
りりり余云て第一そ野篁の歌と一二を在原業平と次これ二歌小よ
りてたんの島といふよ一記記せはまど香深き島といふたて御香の
島といひ恩賀の字たがひなれと訓なるなき其義知ご一まご我島
の説ハ神詠とて傳ふる哥ふとつと此抄を所こ持うたごまごここの
島ぞこれいながしはえこれ義小據まごなり然る小この歌安藝國名所と
て歌枕名寄小出て我島汝島の二島ハ佐伯郡能美島海上小つくと
是とこれ島小つとつと一はてハ神詠と智んを中く小杜撰といふ笑一霧
島といつと何の證となし

懷中抄
あごなるん人小い足せりつとまはのぬき衣させん物うは

劔玉御誓 けんぎょくおんちか



田中 若橋

久うぬれまたあ井

乃あのをそたえ

まはとつたの

なう

まうはの



二神安河のなれ
を隔てむひ立勢
たまふこと女文の
一柱にその番を
かたしてた雲
のさかるとこの法誓
天上のての
一を兜音小頼く知
一老人とてなり

画院 生 大 藤 可 為 筆
画院 生 大 藤 可 為 筆

本社 安藝國第一宮 嚴島大明神

○延喜神名式曰安藝國佐伯郡伊都岐島神社大名神

○諸社根源抄曰安藝國佐伯郡伊都岐島社名神大市杵島姫田

心姫湍津姫以上三座

○大日本一宮記曰安藝國佐伯郡伊都岐島神社

○正殿三座

市杵島姫命

田心姫命

湍津姫命

○合殿三座

國常立尊

天照皇太神

素盞鳴命

○客神社五座

正哉吾勝々速日天忍穗耳命

天穗日命

天津彦根命

活津彦根命

熊野櫛樟日命

○古事記曰於是洗左御目時取成神名天照大御神次洗右御目時取成神名月讀命次洗御鼻時取成神名建速須佐之男命此時伊邪那伎命大歡喜詔吾者生々而於生終得三貴子即其御頸珠之王緒母由良通取由良迦志而賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原矣事依而賜也故其御頸珠名謂御倉板舉之神次詔月讀命汝命者所知夜之食國矣事依也次詔建速須佐之男命汝命者所知海原矣事依也故各隨依賜之命所知者之中速須佐之男命不知所命之國而八拳須至于心前啼伊佐知伎也其泣狀者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾是以惡神之音如狹蠅皆滿萬物之妖悉發故伊邪那伎大御神詔速須佐之男命何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流爾答曰僕者欲罷妣國根之堅洲國故哭爾伊邪那伎大御神大愈怒詔然者汝不可住此國乃神夜良比爾夜

良比賜也 中畧 故於是速須佐之男命言然者請天照大御神將罷
乃奉上天時山川悉動國土皆震雨天照大御神聞驚而詔我那勢
命之上來由者必不善心欲奪我國耳即解御髮纏御美豆羅而乃
於左右御美豆羅亦於御髮亦於左右御手各纏持八尺勾璫之五
百津之美須麻流之珠而曾毘良通者負千入之數附五百入之數
亦所取佩伊都之竹鞞而弓腰振立而堅庭者向股踏那豆美如沫
雪散而伊都之男建踏建而待問何故上來雨速須佐之男命答曰
僕者無邪心唯大御神之命以問賜僕之哭伊佐知流之事故曰都
良久僕者往妣國以哭爾大御神詔汝者不可在此國而神夜良比
夜良比賜故以為諸將罷往之狀象上耳無異心 爾天照大御神詔
然者汝心之清明何以知於是速須佐之男命答曰各守氣比而生
子故爾各中置天安河而守氣布時天照大御神先乞度建速須佐

之男命所佩十津加劔打折三段而奴那登母々由良雨振滌天之真
名井而佐賀美雨迦美而吹棄氣吹之挾霧所成神御名多紀理毘
賣命亦御名謂奧津島比賣命次市杵島比賣命亦御名謂挾依毘
賣命次多岐郡比賣命速須佐之男命乞度天照大御神所纏左御
美豆良八尺勾璫之五百津之美須麻流珠而奴那登母由良雨
振滌天之真名井而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之挾霧所成神
御名正勝吾勝々速日天之忍穗耳命亦乞度所纏右御美豆良之
珠而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之挾霧所成神御名天之菩卑
能命亦乞度所纏御髮之珠而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之挾
霧所成神御名天津日子根命又乞度所纏左御手之珠而佐賀美
通迦美而於吹棄氣吹之挾霧所成神御名活津日子根命亦乞度
所纏右御手之珠而佐賀美通迦美而於吹棄氣吹之挾霧所成神

御名熊野久須毘命拜五柱

日本書紀小巻以日神所生三女神者使降居葦原中國之宇佐島矣今在海北道中號曰道主貴此筑紫水沼君等祭神是也云云また舊事紀よハ三女神降居筑紫國宇佐島在海北道中といハる也筑紫の宇佐島小津鎮座のこと此記せるなりはるを在海北

道中といハる也筑紫の宇佐島小津鎮座のこと此記せるなりはるを在海北

神階 三代實錄曰貞觀元年己卯春正月二十七日奉授安

執國正五位下伊都岐島神從四位下同九年丁亥冬十月十三

日戊寅勅授安執國從四位下伊都岐島神從四位上云々のち

つひ小正一位は後みたまへりをもく神位階を奉らるることハ

もと尊卑を日かたたまへり後令義解采田耕等々に神位の高下

たもて神領の多寡決定らるること見えまた小島准後の造殿後式

々神の品位をとりて封域決定むること有りて正三位以上四至九町

從四位以上四至八町從五位以上四至限四町と見えたり三代

實錄小巻仁壽元年正月庚子詔天下諸神不論有位無位叙正

六位上と母見申

○神領 按ハ聖德太子傳ハ推古帝ハ論旨ハ載せり當社神領ハ

當國中水田一千百八十町修理八千余町と有り是明神廟祭の時の寄

附と見え外ハ證なし神庫小巻めり古文書ハ仁平四年ハ院應

并國司廳宣以て當國高田郡三田一郷ハ神領ハ定らるまた仁安元年の

立券書ハ一官御領志道原合一町六反二百四十歩と有り嘉

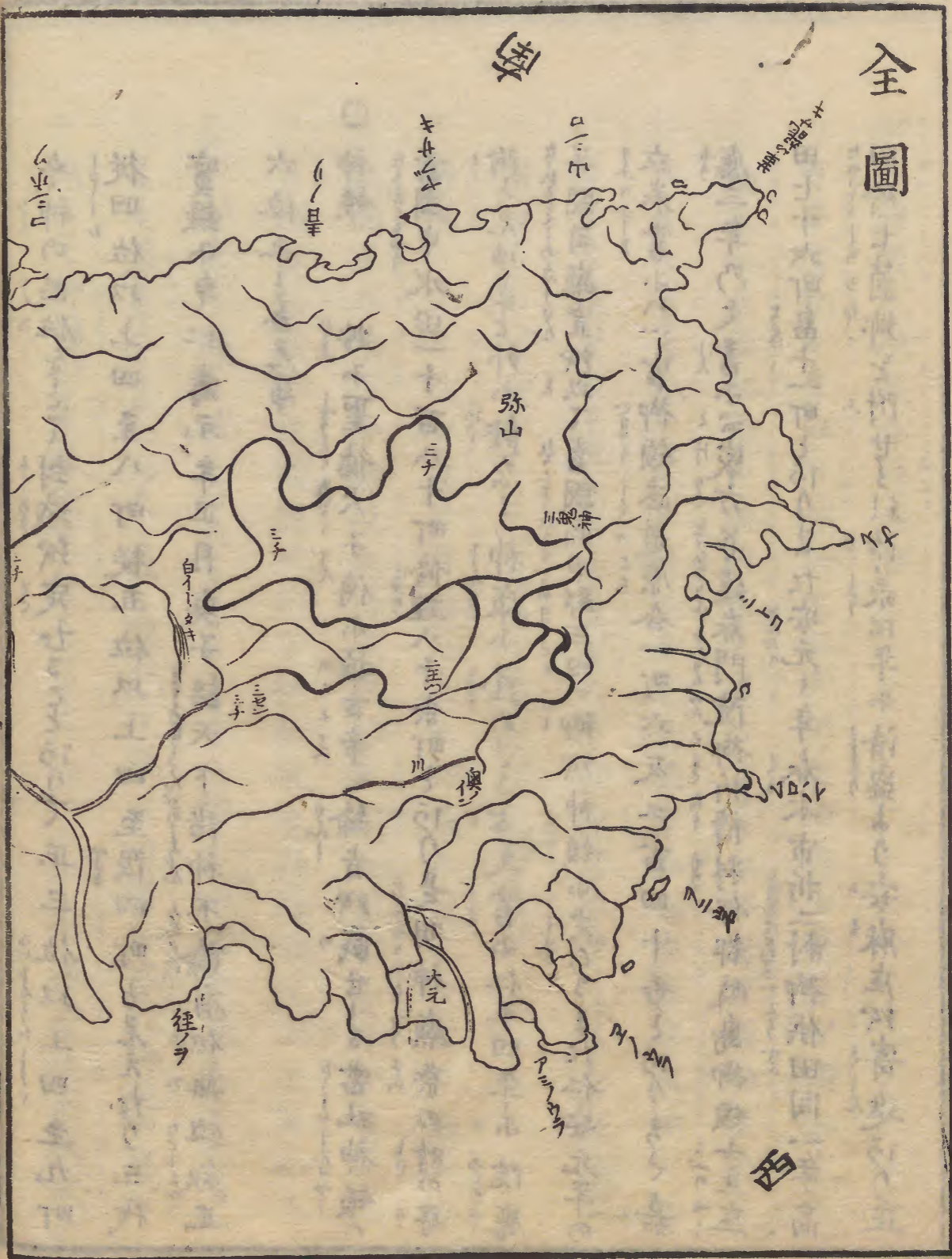
應三年乃文書ハ公家方并建春門院御祈禱料伊都岐島御領壬生庄

田七十六町畠十一町と有りまた安元二年春木市折二村御供田同二年高

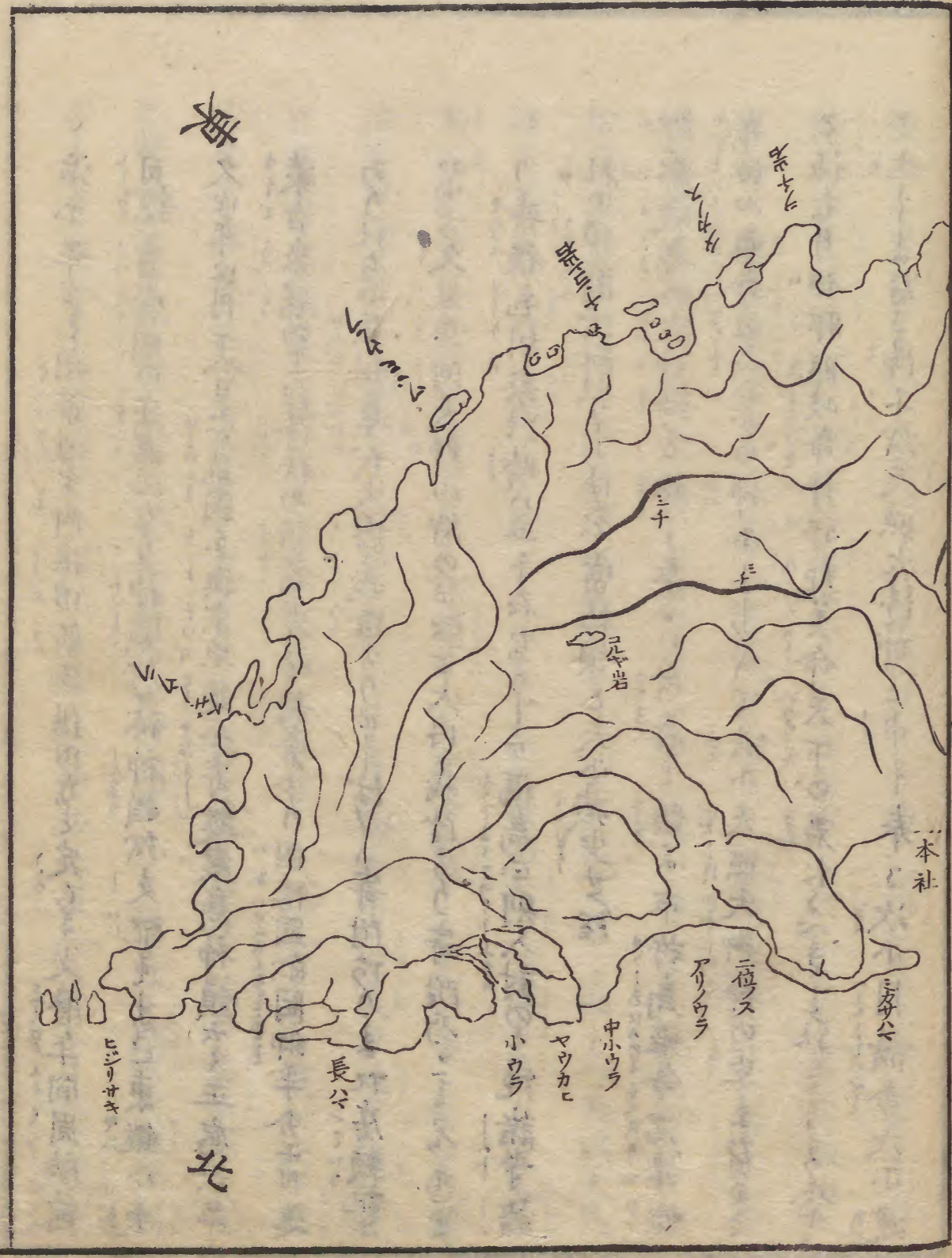
田郷七箇郷を附せり治承四年ハ清盛より安麻庄ハ寄進有り正

全圖

東



東



治元年より朔幣殿中御供田新御供田など定らるる文曆年間周防前
司親實當國の守護となり神職なる神領を支配せし東鑑小乘
久仁年二月十八日安藝國平與末地頭令寄進嚴島神領去く正應六年
蒙古來寇のと降伏の祈禱ありて鎌倉より因幡國船岡郷半令寄進
あり此ちゆ足利尊氏大内義隆より母一ばく寄附たりまた房頭記小
小方久波黒河大野山郷の口々を大内義隆より寄附乃こと久元等
り其後毛利家此時ハ五千石なりしが福島正則入封のし免諸寺諸
社の領園を削りしゆ急當社領と大内減少せし
伊都岐島の大伊神と稱し奉るに掛卷と恐支市持島姫命満津姫
命田心姫命以上三女の神小まりて共小天照大御神の生まるると
る後なり伊邪那岐命伊邪那美命天下の君たるべきと社をうまへんや
て生しはるる伊邪子天照大伊神と申し奉る次小月讀命次小建

須佐之男命と稱し奉れり於是天照大伊神ハ高天原所知免し月
讀命ハ青海原所知を故各依りたまふまよく取知まが申小須佐之
男命ハ其性勇悍くして青山於枯山となり人民を害ひたまひしは
伊邪那岐命いたく忿怒して極えて遠き國小神逐しやらひたまふ
常長小よりて須佐之男命根國小至りたまはんと務りにまつ天照大伊
神小其由故告て後小こせ罷りなめとて高天原小泰上りたまひしは海山
鳴動あふり天照大伊神こせ成聞きて大内驚したまひ是らなる次須
佐之男命の何れ死んより起るるなるべしと事御身小勇夫の猛き備を設
け嚴男建踏建て待たまへまは須佐之男命これ死んまして僕ハはる異
心なり此度父命小逐ましによりて昔白て後まかんなた免泰来つる
とや何事と云ふまははる天照大伊神聞ははるば其清き人何
としてははるたまはんと詔ひき於是須佐之男命はまふ我阿

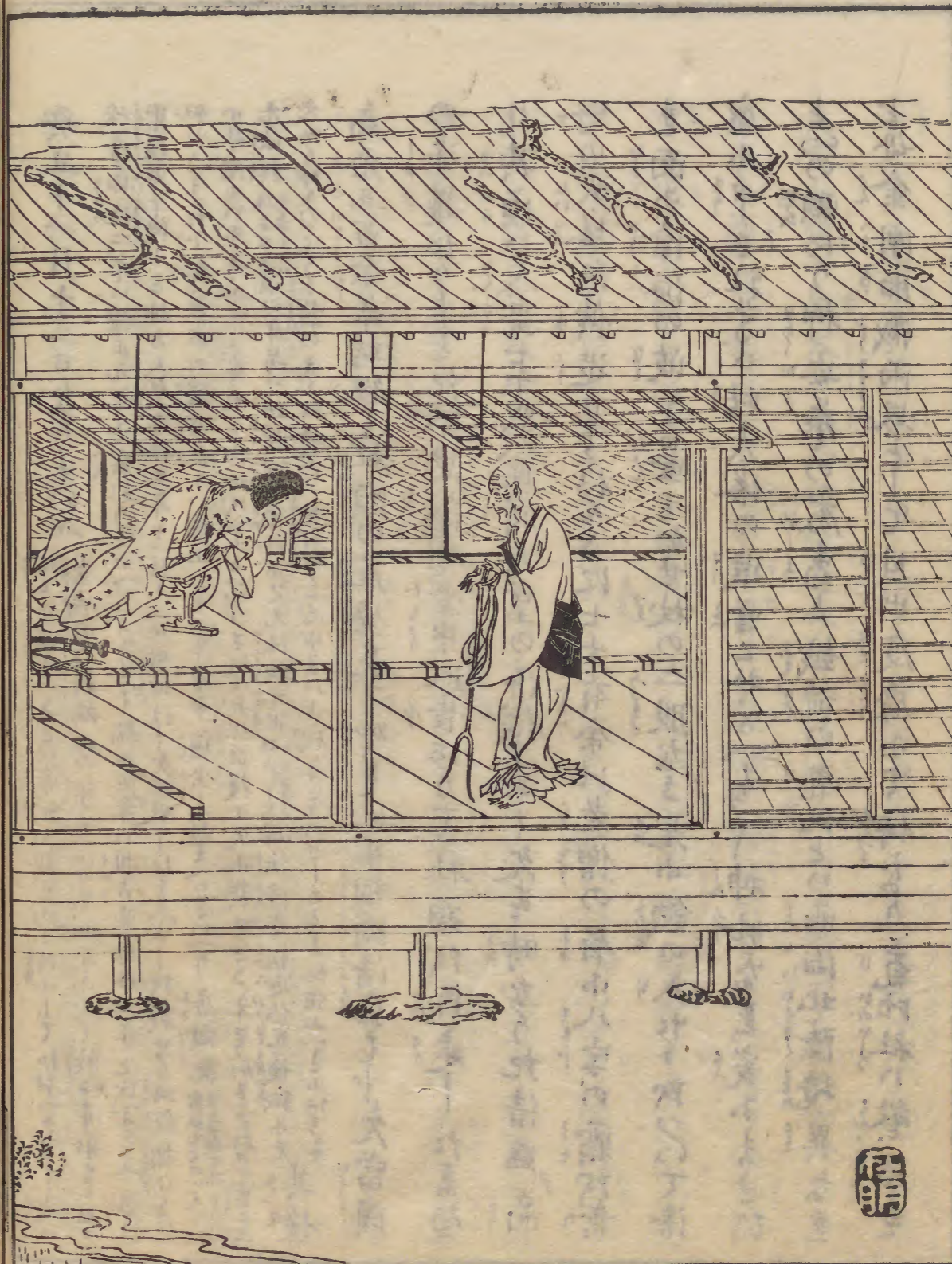
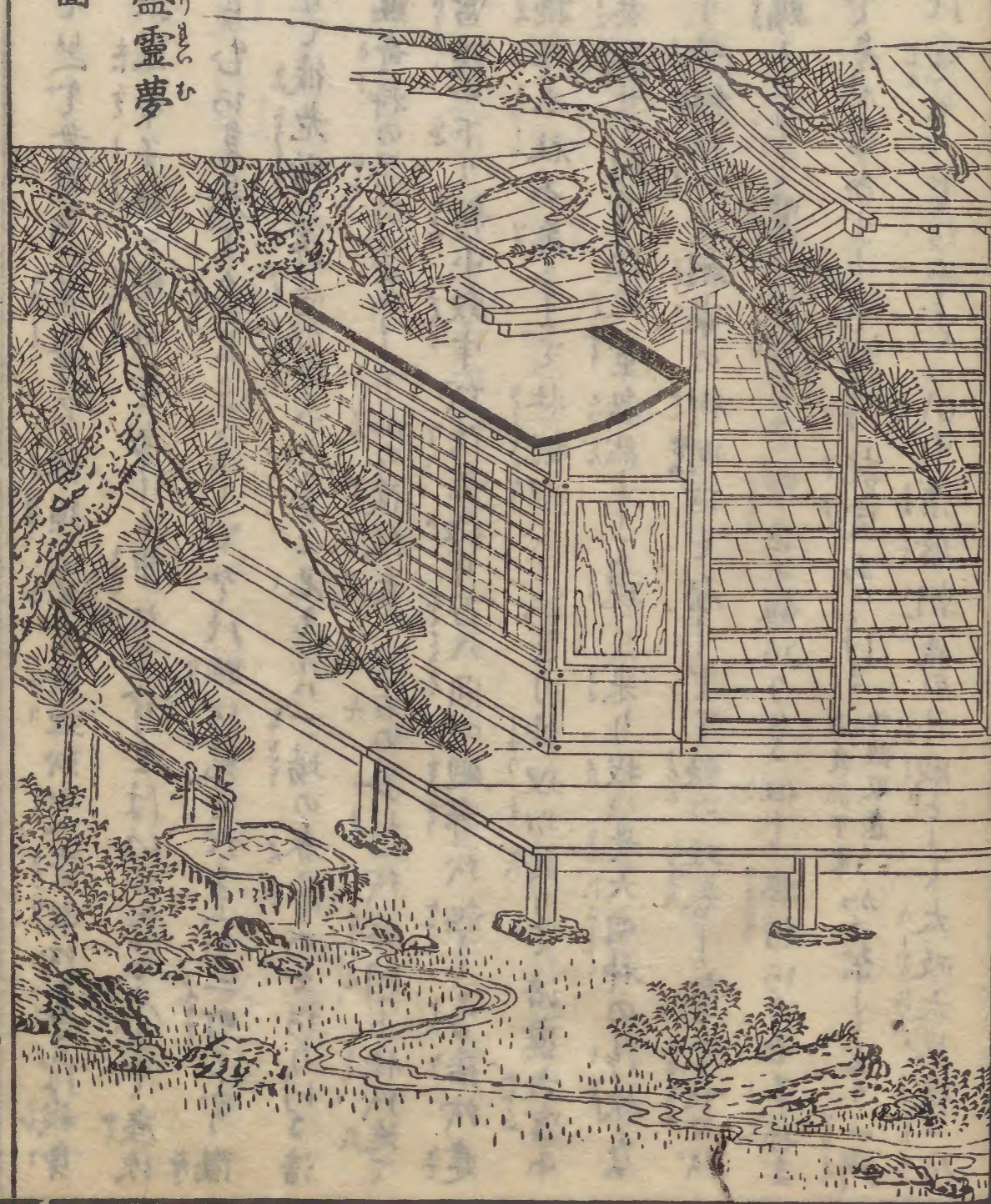
婿と母小誓成て御子生と侍らんをけぬまひて各天安河以隔て誓ひ
たまふ時小先天照大神須佐之男命の佩られたる十握の劔以乞度
りうち折て三鏡小な小天の真名井小振滌き黠然小かて吹棄る狹霧の
中な小生な一なま劣る法子田心姫命市杵島姫命湍津姫命小ま以れ既は
く須佐之男命天照大神のとちたまふ八坂瓊乃五百箇序統の
玉たま成はひとり天此真名井小ありるを成はぐりかて吹棄るはざり此
中な小なな一なま劣る御子正哉吾勝を速日天忍穗耳命天穗日命天津日子
根命活津彦根命熊野櫛樟日命以上五男の神かてまりく多采か法
小富島津鎮座のこと正史小載せしこと外く終りに社家の傳ふる所ところ昔
三神此地小天降りまり此島成法在る小定むゆきよよ當郡の住人佐
伯鞍職と云者小法託言な一給たまへり鞍職からく母官奏成經たれば
御寶殿成造立し神領許多成附たまひたりこれ推古天皇端正五年

癸丑十一月十二日なりといふ

按よ小端正の年号帝紀不載せし所小一ておぼつちなり或は
崇峻帝の朝端正の年号有りて五年小一て終るすれをち崇

峻帝即位二年ハ端正元年ハ當れりといふ聖德太子傳も推古天皇即位元年十一月十二日明神は下りて現れたまふ一つ載せり此説據らるに
似たりまたト部兼右の遷宮記ハ端正三十二年甲申鎮座しにまへりといふ房頭記當社天文のころの相
小年端正ハ年号ありて天子即位ハゆとりてされと大化前後正史不載せし年号かきこれ乃書小み
元法興推古四年の年号ハ伊豫國の陽碑不足元法興元世推古ハ法隆寺親近ハ光後銘小足
えたりかのとくふ載のまり傳ふる金石小足ゆきバ古代年号有りことまた推古ハき不りる其後
烏兔五百余年成經て社頭の荒廢甚しかりしに平相國清盛をドク當國
の守護たり一と起不思議小夢中此告りて社頭成再建したまふ
り其頃ハ人皇七十四代鳥羽天皇の御代なり一欠古時なり起清盛高
野の大塔成修造せりはるに七十有余れ老僧の眉小八字の霜成垂
き面小滄海の波を置てかせ杖の二股なる先小鐵の入ちり成つて清
盛小申されるハ此大塔の造營を持つてはく神妙なき爰もまりこひ
との願はり抑安養の歳と越前の氣比といハ西海北陸境異なき
と母金剛胎藏兩界とて日出度處にて侍なり氣比社ハ熊昌と

清盛靈夢
の畵



在明

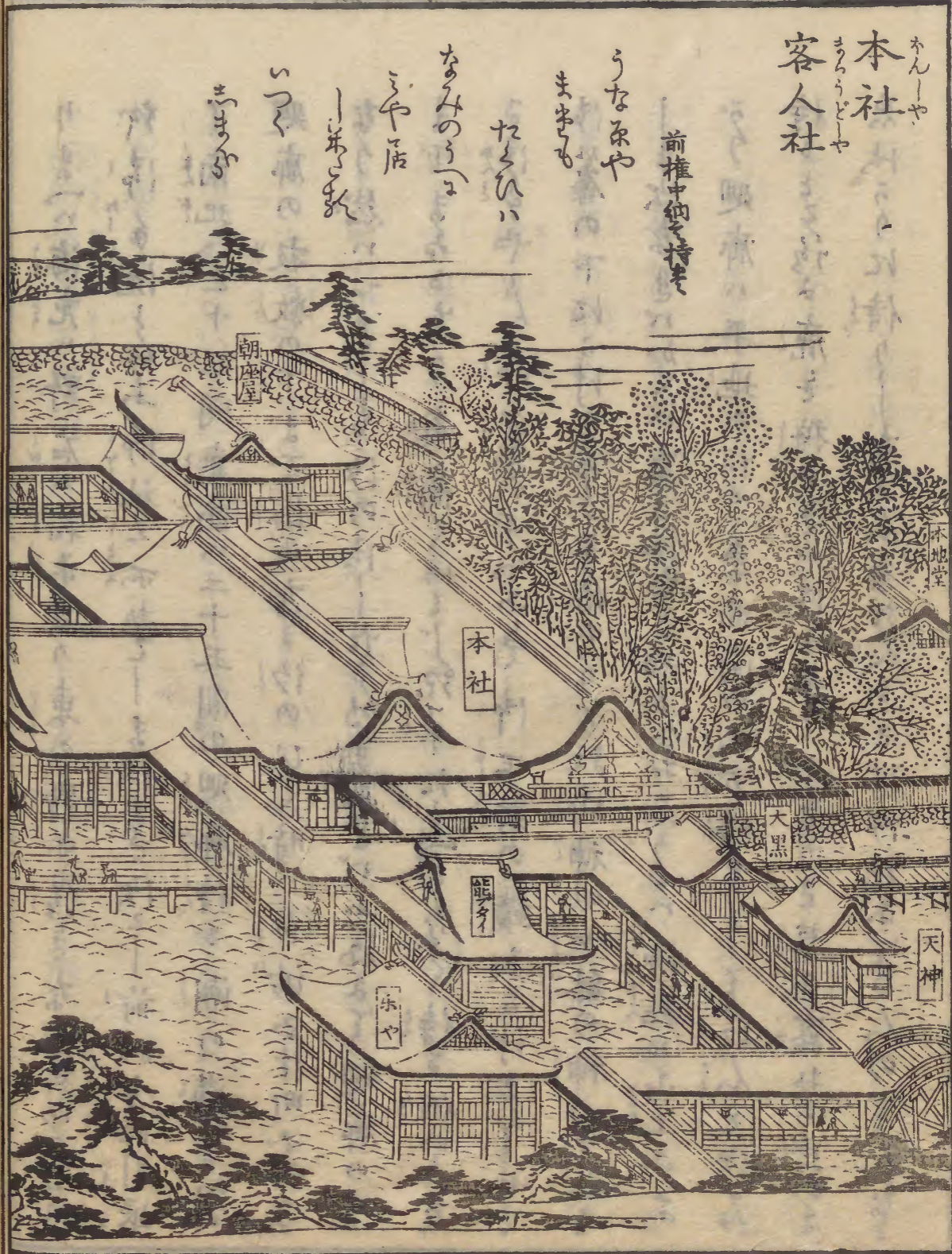
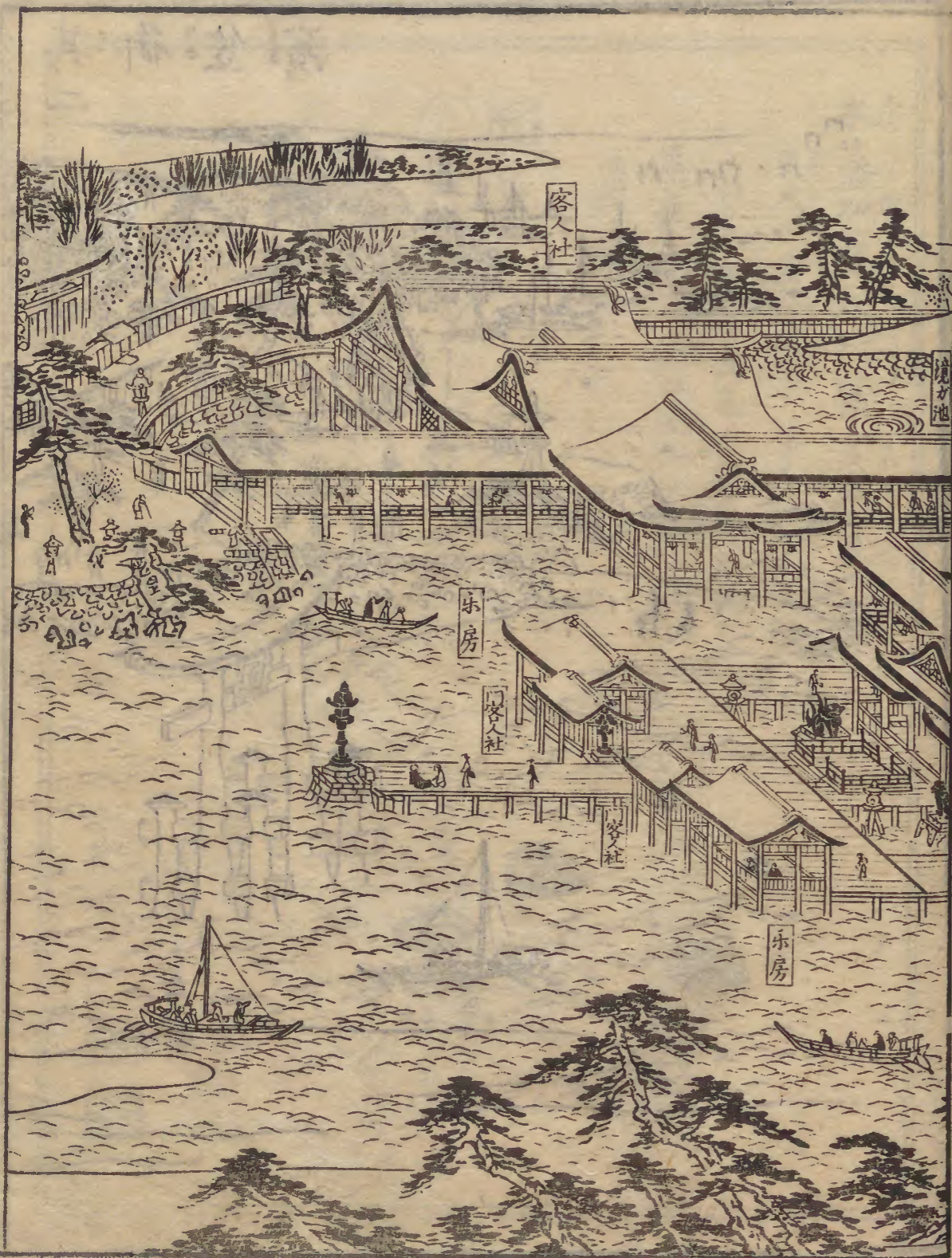
のそとに母嚴鳥の荒廢せり汝須く早く修理加へ崇敬以盡さば我身
此榮華子孫の繁昌たるをいと申たまはりこはいつたる人にて座次
らむらき見て泰とて人してせ此跡以見せたまふ三町むかり隔
りて彼老僧の清堂の中入るよと見え一場の春夢をとりける清
盛奇特の思ひ成なり下山の後院泰して右の夢想以奏聞し任成延て
當國小下り新小殿宇以改免作り百八間の廻廊成起し居成建
攝社末社小至るまで壯觀曰小まはまり修理功終りて清盛大宮小
泰罷せしむるに天童忽然として現し来り我は是大明神の清使な
り此劔以て朝家の御固成を領し定て銀の蛭巻したる小長刀以
賜ると見て覺しに實は其頭色小劔なり但し悪行はるむ子孫ま
で是加なまし定て清託宣ありける盛衰記平家 物語取意か案しより一門
此覺えぬ定たるとくつひ小清盛朝廷の外戚とて太政大臣後一位

小歴上り威を一世小振ひたまひし母備小當社の清をくひと替お
とはせけるはま勢むらしと今母示現即託乃利生新小して上皇
天子此行幸成初免奉り代々將軍家の崇敬せらるるを替お替西
討東征北伐南誅或は自ら蕪藝の礼を取り或は代幣を以てかき
む先當社小おいて軍陣の邊成祈らるる多し就中文永正應
の頃異賊来寇せしにまた降伏の法祈りて此故小社頭の結構ハ
日成逐ひて美麗小四時の祭礼ハ歳々小嚴らなり百八の神燈長
小日月と光成争ひ泰請来拜の輩ハ雲霞とて舞り去来成絶む
殊小此御神ハ海路の安全成守護たまふなむハ澳漕ぐ船と
奠成設て過き漁る泉成とまつ初穂を替おなむ誠小海西此
大社小して當國の一宮と仰ぐ母また宜なるはや清社ハ鳥の北面
小とりて山小背き海小向ひ廣小宮居したまひ替の景たるや

日域よちのくに小名せなたる勝地しょうち小して先哲せんてつ既い小龍都りゅうと仙宮せんぐう小比ひせるもまゝ其當そのたふ
於失あなと次つぎといわべへ廻めぐ居いせる廊らう真まなる宮殿みやうてん潮水しほづみの上うへ小浮うき
んで恰あたも唇樓しんろうの波なみ小漂ひらふごとく弥山よせん北嶺きたね高たかく簪かんざしへ松嵐しょうらん直ちかに吹ふ
落おちて蒼翠そうさい北色きたいろ瑞籬すいせい小映えい常じょうを猻い猴ま子こ於を負おひて市頭いちとう小戲たそふき
麋鹿みしか群ぐん於を率ひきゐて沙上さじやう小卧ふし次つぎ遙とほうに眺望てうぼう於を極きまむきは蒼波そうは渺み
として遠帆えんぷハ動うごちと詠えいぜーれとむきけり且かつこ此島このしまハ橋はし多くー
て百千ももぢぢ多おほ轉まる春はる北きたころハ峯ねと谷やハ社頭しゃとう浦うらこよ至いたるまではくろふ何
らさる取とちなくはながる雪散ゆきさん飛ひ一ひと根ねなる次つぎへ騷人さうじん墨客ぼくかく乃すなはん
を蕩たろ次中秋ちゆうしゅうの月つきハ弥山よせんの上うへより出いでて銀色ぎんいろハ界かゝるとなむむむ
しまこ雪ゆきの何なにれ殊こと更さら小してちえ勢せい眺望てうぼうハおまむ三景さんけい於を冠かん
たる也なりー

○西行撰集抄曰さいぎょうせんしゅうせう何なにきほくまこまの社やしろハうー詠えいハ山深やまふかくーげ

りまへ海龙うみりゆうハ野の右みぎハ松系しょうけいなり東ひがしの野の小法しやうぼうさなるきけりこれ
御清みよしみ手洗てうせんとゆふ佛社ぶつしゃ云いふおとーま次つぎまこ次つぎこー前まへ此方このあたに引退ひきひき
て南北なんぼくへ二十三間じゅうさんかん東西とうざいハ二十五間じゅうごかんの廻廊まわらう侍さむらいる潮しほの満みつとたの
廻廊まわらうの板敷いたしきの下したまで海うみ小なる汐しほのひく時ときハ白沙しろさハ十町じゅうちやうをわり
なり然しかハ何なにきとも汐しほのはーちう時ときまるまむふゆるまて廻廊まわらうの中
まてまゝなり氣け高たかくいど紀きるたともなく侍さむらいる但たいらな
る佛ぶつ子こやるん佛ぶつ簾せんのうーふき佛ぶつ正しやう躰たいの鏡かがみをうけまゝせで
佛ぶつ簾せんの下したにうけまゝさる佛ぶつなりう此街このまち神かみハ女によ躰たいの神かみ小ておと
ーま次つぎなきはかくハちうは勢せいるやふんおわさハ佛ぶつ社しゃハ山止やまどふあ
がり廻廊まわらうハ平地へいぢハちう東西南とうざいなんの三方さんかた暗くらきうーこにんを次つぎみ
侍さむらいるところは鹿しかを狩かるまむ佛ぶつ山さんハまき小鹿こしかなき草くさ小露つゆおち出いのこ
をけうりに侍さむらいりーなまんな人ひととこ此佛このぶつ社しゃ小てハんのまむむむ



かんや
本社
客人社

前権中納言持

うな茶や

まきも

ねんひ

なみのうま

ちや店

一巻の巻

さつ

きん

本社

天神

茶や

乐房

乐房

客人社

其二 御筮濱



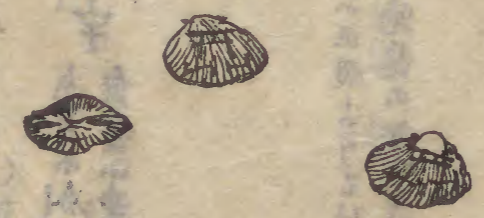
本藩加藤氏所藏宮墓貝の圖

見大さ箇のこく一ひさりの如き白丸
 ろひまで表小鳥居の紋あり文化乙
 丑のと一大多居の洲亦て拾ひ得
 ものと我

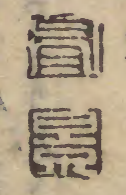
所々ちみの一ゆふ

外の二やうつ一貝

山田貴三



法橋有景寫



とて其傳へて侍る 松ふに撰集抄ゆりふとて後よくこけ地の景勝なりなり但し其頃ハ
所置よりいま清靈川の南ふなき松林原野にありとて今ハ市街にあり多く堂社
清靈川の抄小東の野に流し流りといふこれなるべし

○大宮寶殿 明神鎮座の正殿をいふ 幣殿 正殿の前小作り折三
十二間梁五間五尺余 間二尺梁二間五尺 殿幣

○高舞臺 伶人舞臺の臺なる處なり枝殿乃まふ作りて神殿
左右小作り臺下柱石三百十二本高五尺五寸圍 樂房二字 左右小作り
八寸こまこく赤間關の石にささふ

○門客神社二字 樂屋とちびて左右小作り
俗沖惠美湏と称す

祭神 豐磐間戸命 攝磐間戸命

○廊 門客神社二字の間より長く延出して西北小作り正殿よりこける凡三十六間作り
當社宮殿と中央小神殿とをさ長廊廻廊して蟠龍の如くこけ處長くこけ出た
り依て俗は是を舌先とあふ

○大黒堂 大宮の左 祭神 大國主命

○天満宮 同殿の傍小作り毎月連歌の會あり故に
連哥堂とて古人の名をかり

○客神社寶殿 大宮の右三十間あり西南小 幣殿 客神社の前小作り折
三 間四尺梁二間一尺

○後殿 かなしく拜殿の前小作り
折五間梁四間四尺

○廻廊 かなしく百八間作りて間毎に燈籠一箇を釣るまて
廊の板敷釘を用ひこけ故に歩行歩小隨て鳴る

○圓橋 大宮の左あり御池に架せり幅二間
長十四間俗小及橋と呼ふ

○平橋 大宮と客神社
の間小作り

○瑞籬 大宮客神兩宮の外垣なり長あり
百間ありこけまを玉の御池といふ

○御供所 本社の東あり

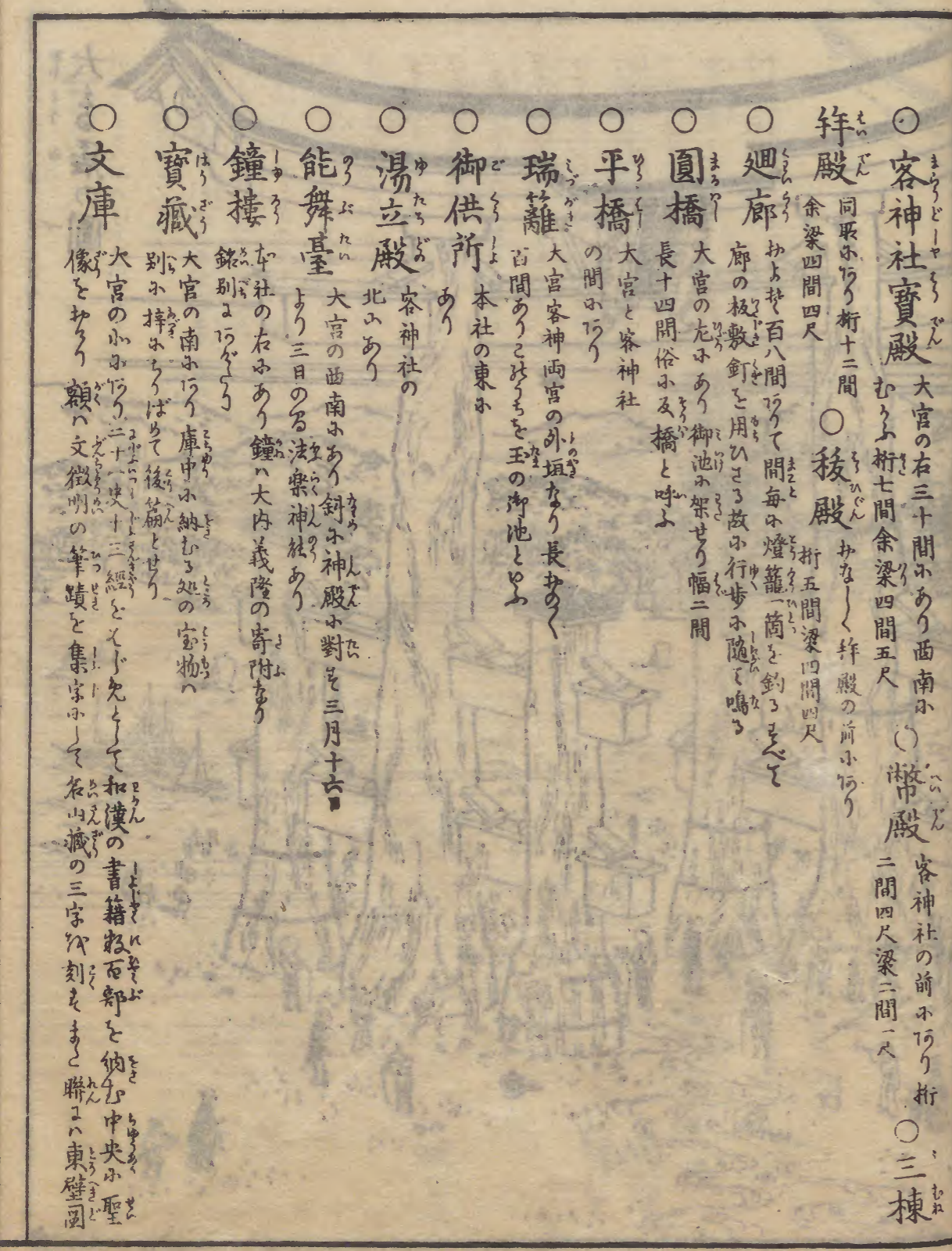
○湯立殿 客神社の
北あり

○能舞臺 大宮の西南あり釘小神殿小對を三月十六日
より三日の法樂神祇あり

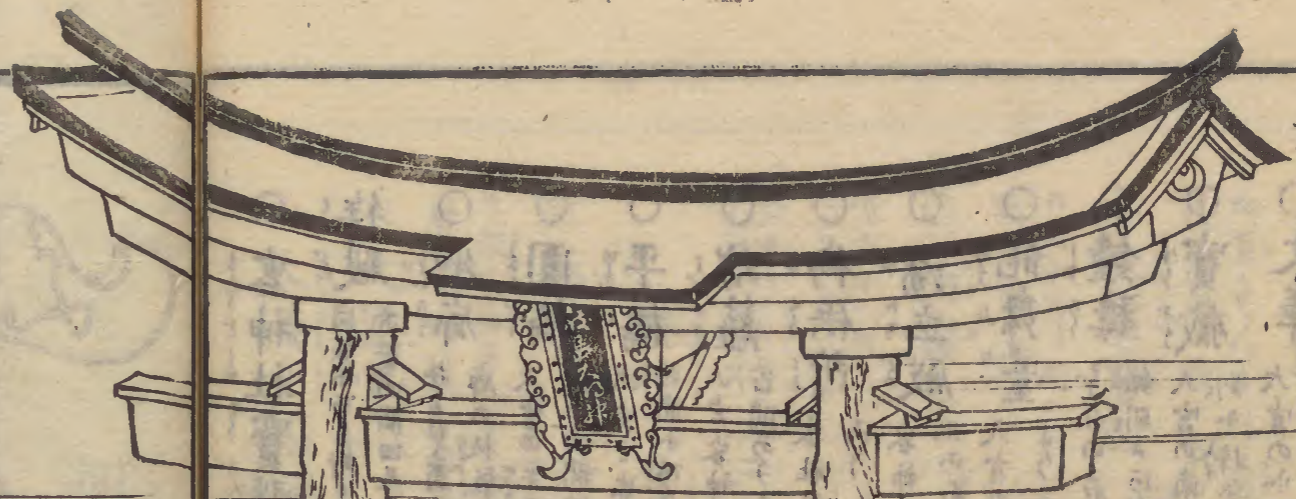
○鐘樓 本社の右あり鐘ハ大内義隆の寄附あり
銘別よりかり

○寶藏 大宮の南小作り庫中納むる此の宝物の
別小持よりかり後崩とせり

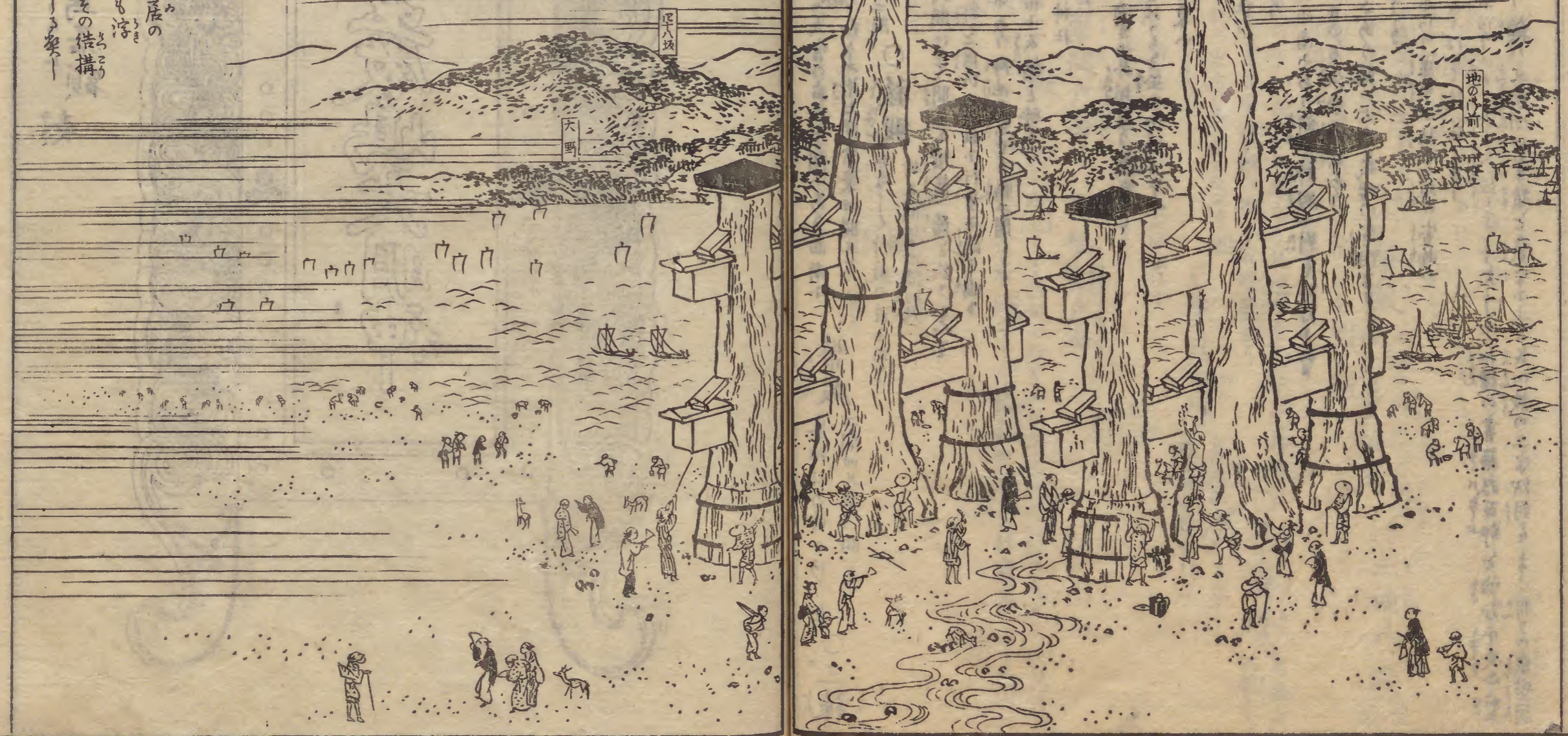
○文庫 大宮の小作り二十一丈十三經をこけとて和漢の書籍數百部を納む中央小聖
像をかり類ハ文徵明の筆蹟と集字小して右内藏の三字ハ刻をまて聯ハ東壁圖

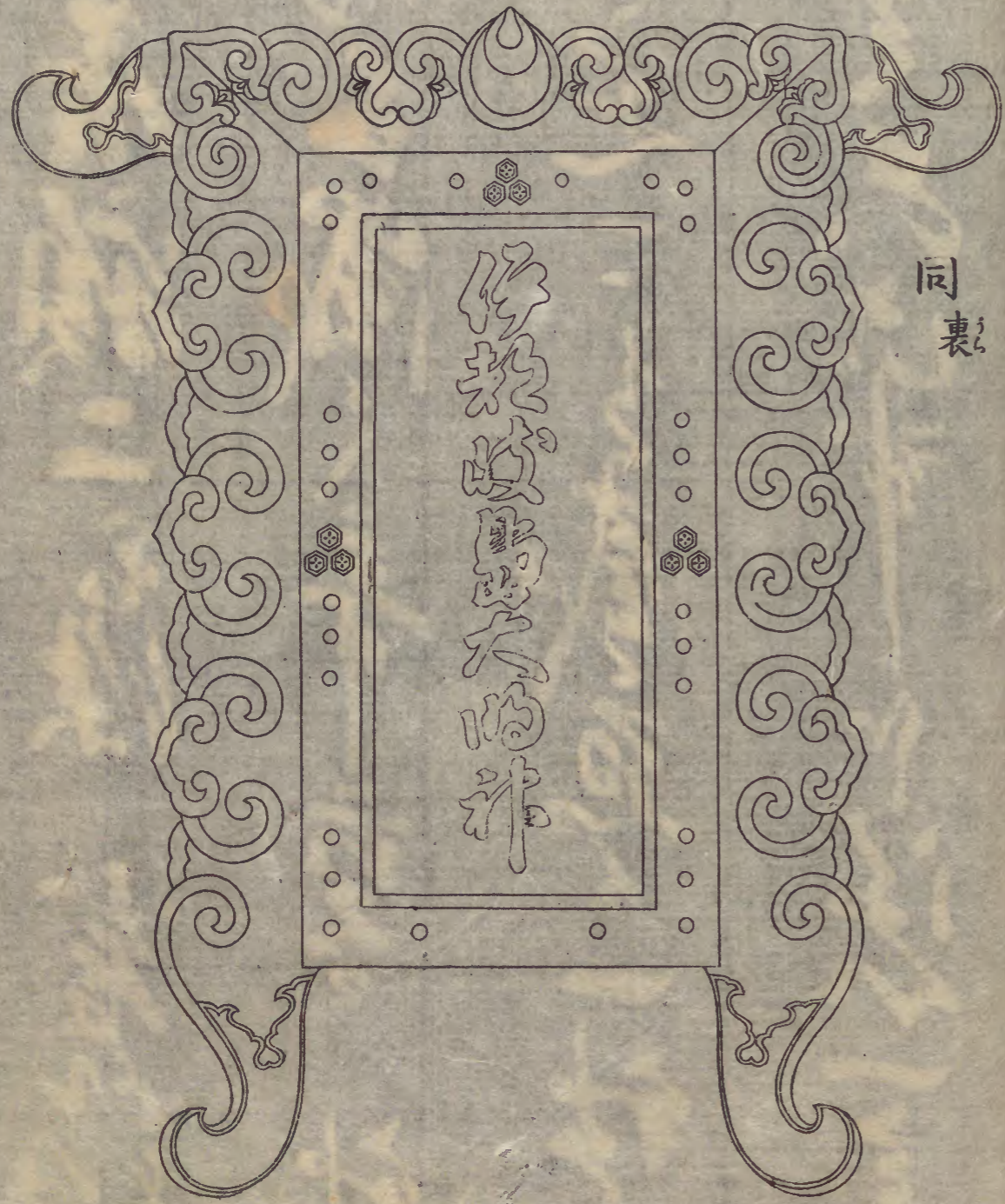


大倉居の圖

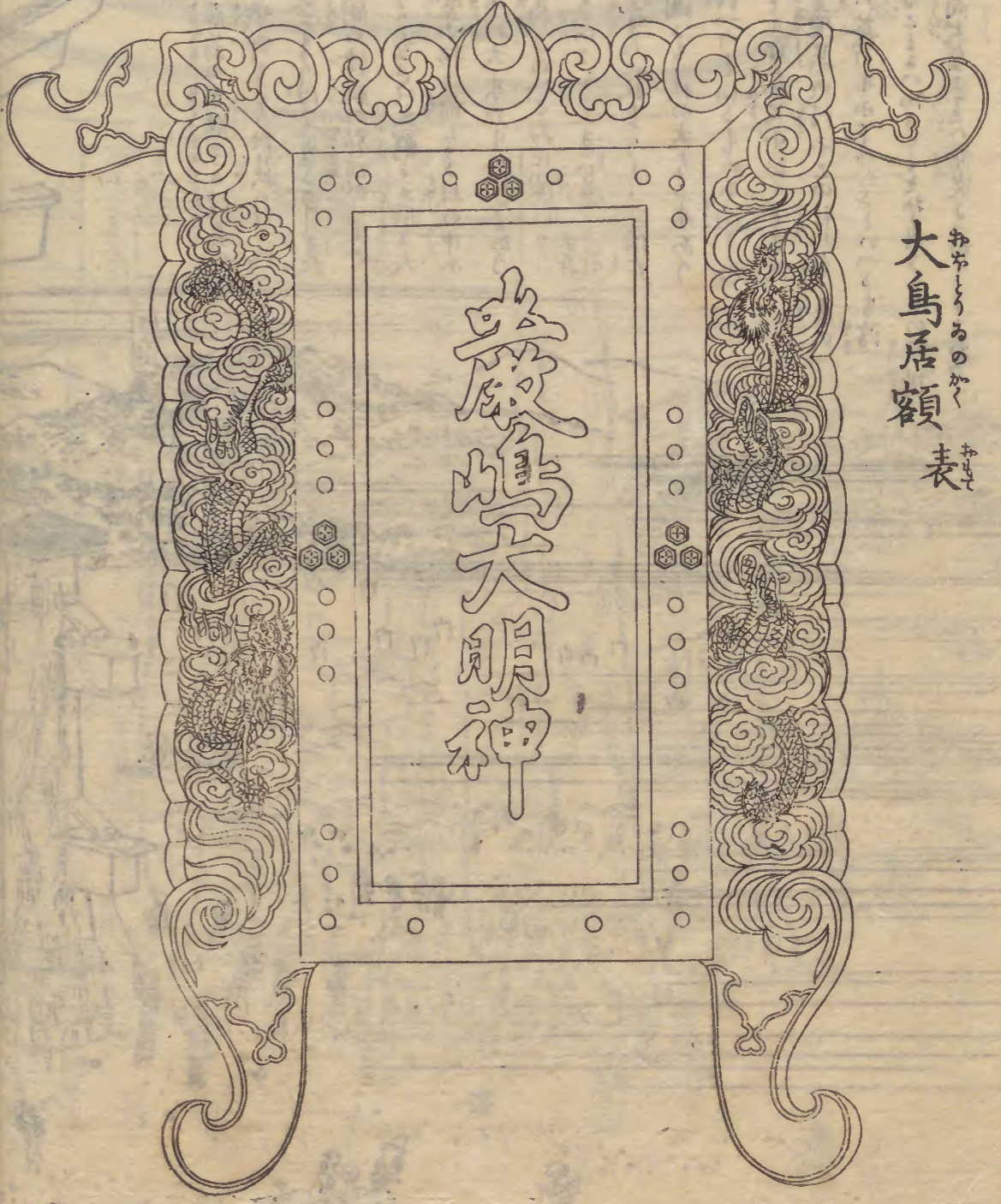


本居の玉膳乃云陸奥の
 官城野にありて秋はたは
 二丈あまはくちなる多しまた
 円國の津輕の弘前の二里を
 かりこちにて大鷲と云取大
 日堂の前の前なる林の中小
 一本此大本の十餘丈をかり
 の高さのたかみは圓はくり
 なるものを足さば葉も花
 も金ら萩をくりまはさ
 の園も萩の大なる本あり
 といつとあるもの記した
 りといふ本文ひくと後
 草庵集の注ふこの社乃を居の
 柱ハ萩の本にてつらといふも浮
 たることはいつしとをわらうその倍構
 の高大なるといふ文よつてて一なる





同裏



おぢしるのりか
大鳥居額 表

多居額二毛深 震以爲
三爲子歲八辛辛 言言 秋
道定一二三歲 道定一二三
道定一二三歲 道定一二三

古事新

空神文長之世

大内義隆花押

二月廿五日

大内

廣源社之形

書府西園翰墨林の句あり
北島雪山が筆なり

○大鳥居 古先を去ること七十間余海上に柱高四丈四尺三寸圍一丈五尺副柱高二丈八尺圍一丈二尺五寸棟長六丈四尺四寸梁五丈九尺六寸九右柱欄去ること五間余結構高大なり

これより此も居改作ること数度まづ平家物語小清盛も居まで改作ると有りその後寛元仁治の間本社修造の時に改免造りまこと弘安九年應永四年天文十六年元文四年享和元年を以て次かく数度の経営みな小糸足利大内毛利尋てハ本所の沿革の沿革附なり按ふ草唐系蘇のこは後小蘇州いつくまろも居の柱ハ五抱有り一本ハ萩乃木小て作るとしゆゆの頃なりらん島もそを此傳なり

○同額 堅八尺三寸横四尺二寸 面不つて見え

今の額ハ 後奈良天皇此宸筆小して大内義隆の奏請して奉納す一不たり傳へい昔の額表ハ小野道風裏ハ空海の筆なりと

按ふ玉海

高倉天皇の兼安五年七月十三日右衛

門督宗盛以信基朝臣示送頼輔朝臣云伊津岐島額可申請也有恐本額前大僧正被書之今亦立鳥居仍可打額申他人有悞由也可然之様相謀可令申と有りま兼安元三年六月十八日

今日召平明送伊都岐島額於右將軍之許来月入道相國相共可参詣彼社抑件額字都津兩字未決仍尋官文殿式正之可處為都字之由隆職已注申仍用件字と有り小よれをう此乃風乃書といつる承安元より前つた此となる也

○繪馬 上諸侯より下庶民小至るまで第國より献一奉る所小

て其盤多なる凡天下に冠たりまづ本社の組入此より初て客神の宮三棟お殿東西廻廊此間透間となかけなく其大なるを凡堅九尺横一丈二三尺小至ると此つてみ名画の巧く紙畫せり



就中古法眼元信の牛若常信の七福神狩野九近が馬尚信の羅城
門土佐某が三十六哥仙うたハ山崎宗鑑の筆なりおましく哥仙繪ハ
古佐家書ハ昭高院道澄親王曼等世のよく知ると云故なりその余
石川九近をとり系近世諸名流の墨跡をとより松峯をとりいと海
あつた

○社頭修理

推古天皇の法代佐伯鞞職官奏成經て始て宮殿を
創建をせむはいつたこれ南社造営に始なるべし其後法盛撰社末
社廻廊鳥居に至るまで悉く修造せしめて平家物語も見えたり但し
其間修造のことろ幾多れど典故の徴をばまなれを考ると云故なし
そはち仁安元年初官佐伯景弘が修理奏成小神殿并小舎屋私カ
を以て改作すよー見えたり建永二年小殿宇回祿せしは官使を下し
地を檢し造営を命ぜらる建保三年小なる貞應年中まると回祿

を四年の後安貞元年小平宰相經隆南國の司として下向造営
せしと有り天福年中初官親實大工少工鍛冶松尾匠師など
の諸工匠鎌倉より召よせ造営せしと云勤しむつひ小嘉禎元年
勅して南國を社家小附せしれ八年らる其貢をともて兩宮修造
一奉る仁治二年大半調ひいけいまま全備せざるを以て寛元二年
應宣を下しまぬ井原の地を神領小寄せしれ造営の料を助ぐ
き旨命せらる其後など為り弘治元年毛利氏陶全善と合戦の刻神
殿まで焼くしけ吉川元春の力小より災免せしこと隆徳太
平記小見えたりはきと神前を清久人がたえ同二年毛利家より廻
廊板を改作らる永禄年中和智豊郷同湯谷久豊兄弟神修り
おいて誅せらる此機ふよりて毛利家より改造せらる元龜三年に
成就せしは神祇官吉田兼右下向ありて遷宮の式いと厳重

○撰社未社

大元神社

山王社

今伊勢神社

杉浦神社

青海苔浦神社

御床浦神社

牛王社四取

地御前社

天王社

角振社

瀧宮明神

道祖神社二取

惠美湏社四取

鷹巣浦神社

山白濱神社

包浦神社

熊野神社以上島内所

速田大明神社

大瀧大明神

官幣社以上島外所

白山神社

湯殿山神社

荒神社二寺

腰細浦神社

洲屋浦神社

養父崎神社

大頭大明神社

惣社

○社家供僧内侍社役人職名

棚守職一員

大行事一員

修理行事一員

客神社棚守職一員

神樂男六員

御湯立祝者十二員

鑄物師

國府上卿屬官九員

上卿職二員

檢校職一員

小行事一員

客方十五員

仕人七員

大工職一員

瓦師

祝師一員

横竹職一員

地御前棚守職一員

内侍職三十一員

神馬別當職一員

小工職一員

座主

修理別當職

社僧十五坊

○百練抄曰承安四年三月十六日法皇後白河

建春門院臨幸安莚

嚴島四月九日還幸云々

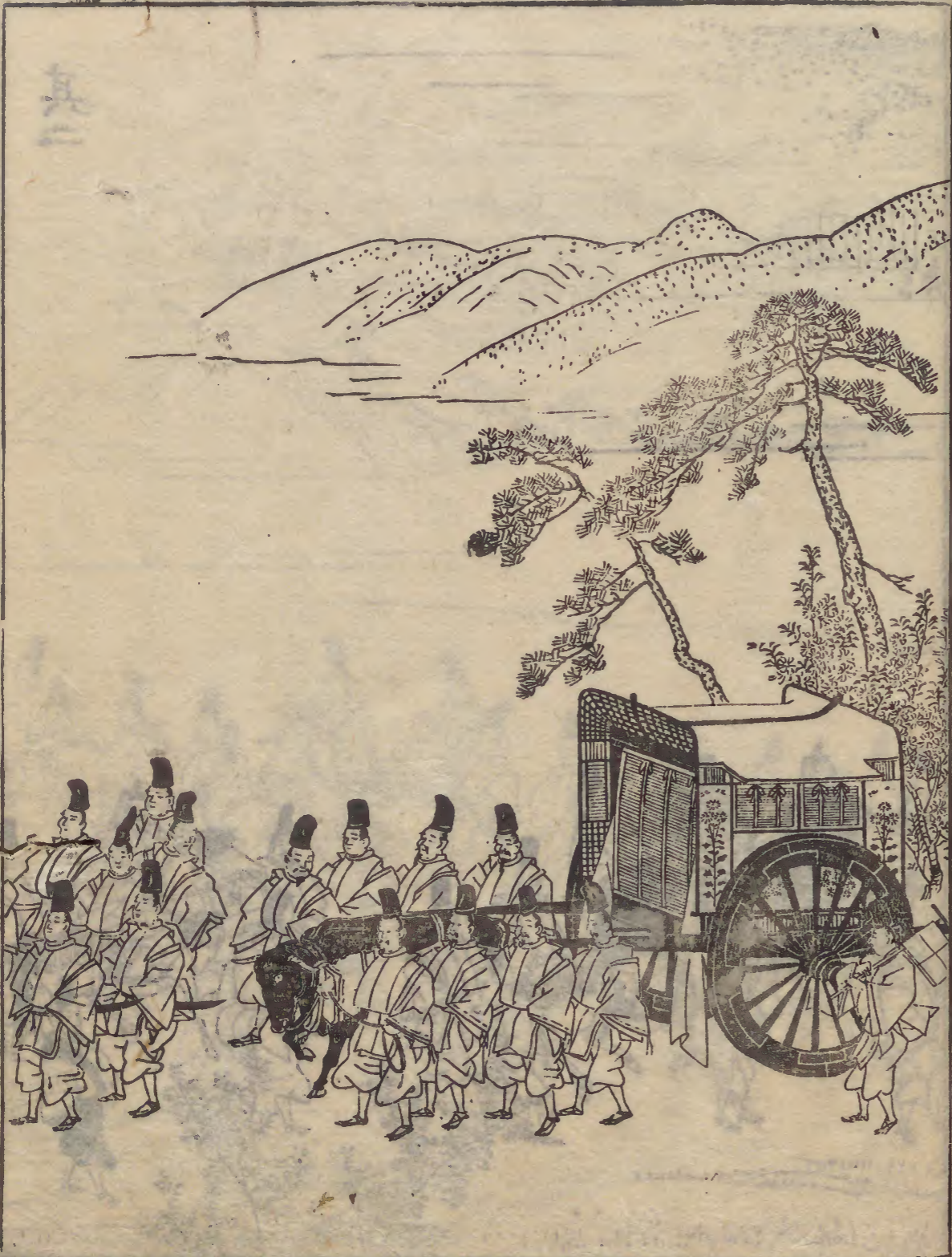
按ふは此時右大臣藤原俊經建春門院の御願文抄書一と盛衰記示元たり

○梁塵秘抄口傳集曰あねのくわいつく一伎一建いんもん院いんあひびしてま
あふこと何りきやよひ乃十六日京をひいでたな一月廿六日まね
りつらり室殿むろのさま廻廊まわらうながくつきたるま一ちたしていん
らうれ下まで水たへり海のかたてに浪なみ一ろくちちてなぐれ
ちもむへ山やまをえき傍かた木きみなちをこころてみどりちりやま
みたくたごんせれの石水際いしづみ一ろく一そばびたり白地浪時しろぢなみとき
うちろくたほこまことかぎりち一たといより母おも一後く見ゆ
そは金乃内侍ないしちりくろ寂迦じあちりかろ装束ようそく一髪かみたあげ
舞まひをせり五常樂ごうりやく拍子はつしをまふまかくのちその袖そでちりくもか
くやありんとおぼえそ免まひでたり此上達部殿上人このかみ樂人太政入
道みちそのとも人いまご座ざたぬわどにまはしきみことと年としよれ

る女にま具ぐして人ひときたまり我わがふむひて痛勞いたうらひな屋やうとれま
う次つぎこといちなふ一後世ごせいのこと知しちるおれまおぼ一免まひせ今
松まつ城じやうきちやとゆあまうをばして一母はは屋やちりつて次つぎ祭まつりを
屋やうもなきて何なにふなわたびく一む資賢しげけん城じやうよびてこれこ
へとつふ畏おそりて居ゐたりなちまきむとい一むをちなくして次つぎ

次つぎ舟ふねの声こゑ聞きいふはうりよろこび身みより母ははちま
ら舞まひ一むちらが後世ごせいのちとけをとたうに言ことはる
るふなれむ

といしてこれつけをいど資賢しげけんあつてつるそなとて二反ふたへん知しちりま
たろ語ことばは後世ごせいのこと他ほか念ねんなくまうはる知しひ物ものちり一は信しんち
祭まつりてなむとあさへがかり此太政入このかみをこ此この神かみハ後世ごせいをち知しよ
ろこばせたまふよ一まうはせ一ちはぬたは現世げんせいのこといとまう

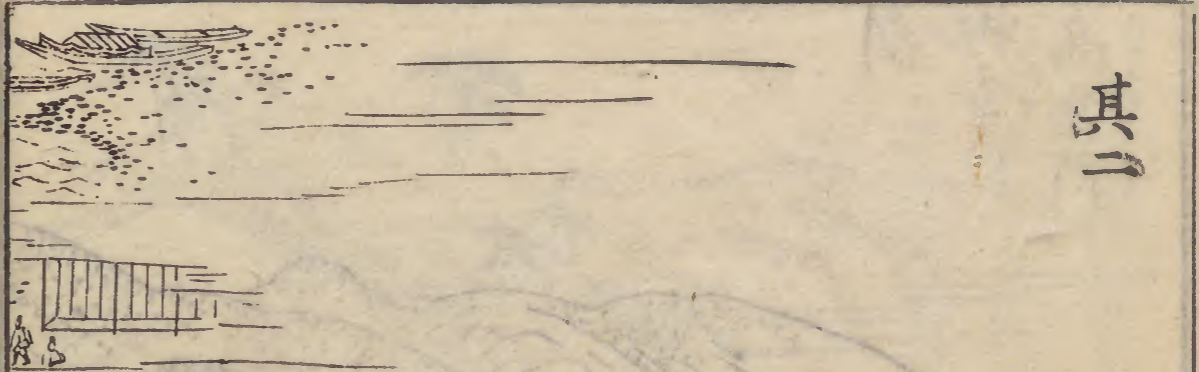


其二



たつぐうのしやが
高倉院
御幸の
番

印



其二

ぬうふはありうは後世にやけいひでたりしなり

○百練抄曰治承四年三月十九日新院高倉嚴島御幸

○山槐記曰治承四年三月十九日新院令泰安菟國伊都岐島給

四月九日還幸御幸間被行勸賞從四位上平資盛福原正五位下

平清邦同從五位上菅原在經國司賞安神主景弘祝師支之已上人

御導師前權僧正公顯追可請在經被聽新院昇殿後日相尋帥

大納言隆季被答還

高倉天皇御幸記

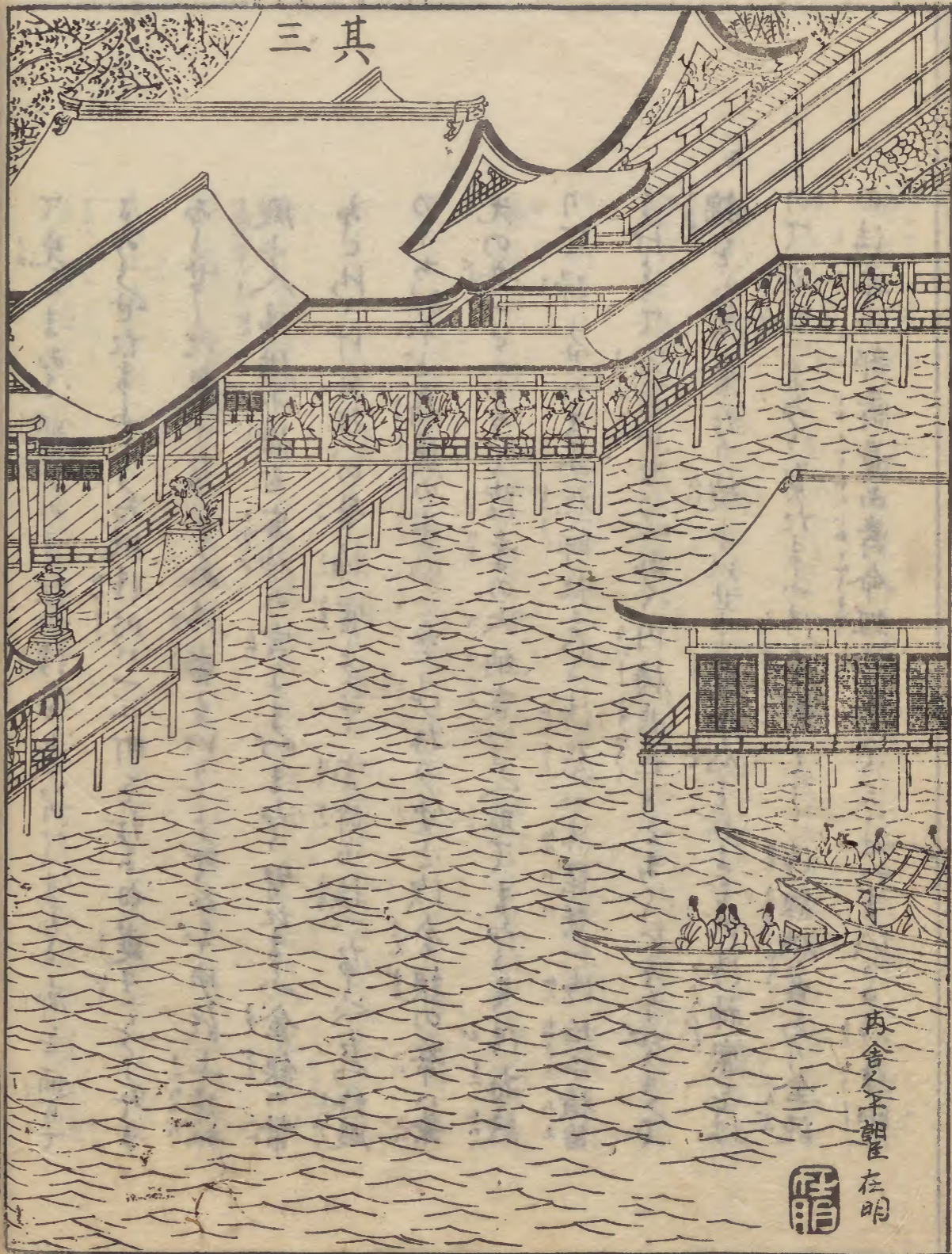
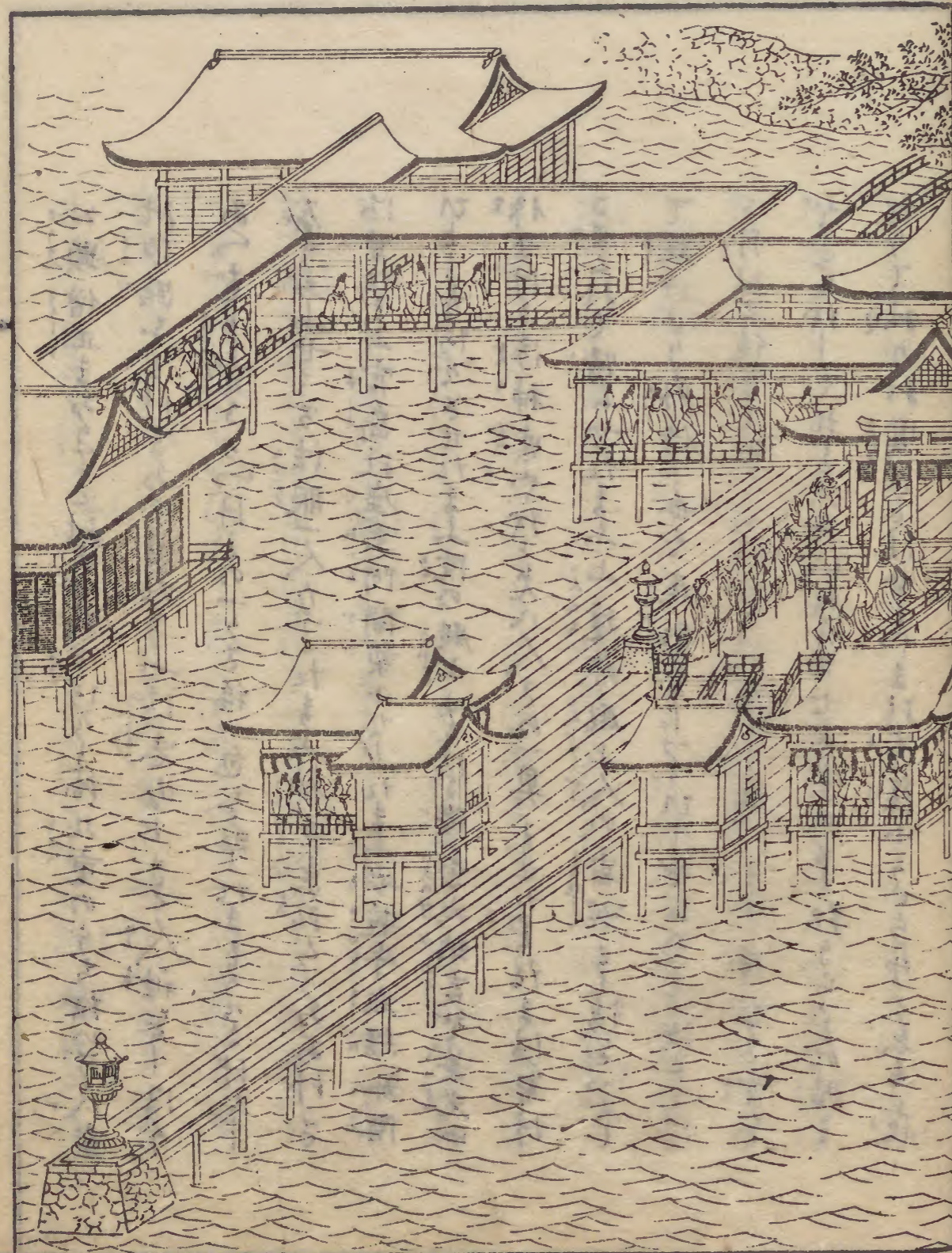
土御門内大臣通親公作

治承四年三月十九日還幸御幸間被行勸賞從四位上平資盛福原正五位下
平清邦同從五位上菅原在經國司賞安神主景弘祝師支之已上人
御導師前權僧正公顯追可請在經被聽新院昇殿後日相尋帥
大納言隆季被答還

將時實などはては女房五人をかりけりきき人々をまゐる人か
わうはとわが勢とはまゝに船おびたしくみの深小つう勢
たまふ中畧 弥生せりし申の時小あきほはうまへはとらふとら
あつくとけりてなういふまて髪髪あひひ身法む宮島ちうく
なりあつりとたよきん我を在廿六日室のうけうらうらわく
神のんとうけらうを勢たまふやとえんごもう勢てまゝし
日はいつる本とに出せたまふ午の時小宮島ふつせたまふ神宝
はみ孫尋らうう勢てまゐり設たるよいかは陰陽師の船暫らく
まゝう空けり起ると後のけりさ後眼とんもおよを次大唐の湖
心寺をかぐやと名元神山の洞なごんりたるんそら次宮島
の有乃浦小神宝とせたるはあつり社司持衣など著た
ると此神宝とちてまゐる大幣小後ひ清免やてまゐるはる

時実の中納とうつぎてまゐるに潮ひくちきてして湯下(湯舟)
ゆき祢をはしち祢みておちりさせたまふ公に湯舟祢はは
らひて宮一階の南のたて三間に面北湯下つらうて障子此
繪とを海のかたをせかきたるうみのう(なが)はまで廊をこり
つけくしちみとせ湯船をたしち船んまなをせしち湯
湯殿などつらうて緋の湯淨衣先していでせ湯下湯下のひ
んがしち庭の白木の葉をたたくもひちちて白妙の幣
かよせしつるはひちちち唐櫃の蓋をたけて金の幣をおく其
西の葉生知りきて陰陽師の座と次神馬一疋たつ九衛尉
信定時棟こをひく北面などといまこはしち欠ちりせ祢は湯供
まは上達部の侍をせしち隆房の中將湯前中侍が女官
内少捕棟範役送をらとむ湯襦をせせしち使湯沓持

て先小まゐる廻廊のまれの儀を先くしてまゐる廊を通りて
らせせたまふらおれ湯時一二町をなほ母蓮道をせしち
あせしにえしちちぬ湯沓もいとせせしちゆは上達部
殿上人湯供小候を客神の宮ままゐる幣たまふ金銀の幣
あせしち白たの幣神官とりて室前小使(ち)ちち特殿
のうちおちち高麗の半帖一尋湯沓の坐と次金銀の幣兼
光の舟つらうて隆季の大納言つらうて取てまゐる湯沓終
りて帰せせたまふ祝師たまら湯琴一湯琵琶一湯柏子横笛
うけらうて室前小使(ち)ちち内侍共色くさあしちちせき
錦をちち著ちり縫とせしち眼もんとおよむ湯神樂をは
りて大宮(ち)ちちち勢たまふ湯奉幣をて湯經供衣あり金泥
の法華一部壽量品壽命經つらうてせたまひる湯守師



再會人平朝臣在明
印

公頭僧正こうとうそうじまゐりてこれよりまじ九重くじゅうのうちち初はついで八重はちじゅう
此こゝ夕路ゆふぢをとけまあらせたまふ清志しなどまく人社じんをしほり
あらむり上うらるうづけの一いくと糸いとをせたまらるるげん一
をらあらせらるる法眼ほふがん一人ひとりなしたまふ神かみ主ぬし系けい弘こうらるあけこ
はせたまふ宮島みやじま此こゝ座主ざぬし阿闍梨あせり小こなしたまふ安あ菟う守し在あ經けい加か階かい
ひとしならんとせたまふ院の殿上じやうゆるはる隆たか季せき大だい納なつ言ごん兼けん光こう小
作せせける清神かみ樂がくやたと久八はち人にんまか一い具ぐまとならどたまははら勢せいけ
る日くりて帰らせたまふ上う建けん部ぶ殿でん上じやう人にんの宿所しよらる後ごをつくし
て設けらり内侍ないしどもも屋形やがたをしつりひておおのく後ごにけ
る月此こゝ後ごならるるまらうばゆらにおとし後ごらまし月なき空そらを
ぞくち初くおとひわひたる廿に七しち日にち空そらのム一いつ起おららるる暗くらま
たりており此こゝ驚おどれとは會あやま此こゝ木き蔭かげ小こららゆらるる夜よ

をこえて潮つとて清所じよのまへまではりりたるまをこにこれ世よ
此こゝ有ありまもも見みえむ供く養じやうなどはてまらば清せい宮みや免めんらりらる
勢せい一いつとて宮みやへまあらせたまふ今日けふへ布の清淨じやう衣えをせめ
したる國此こゝ守しゆどもまらるる勢せいたる此こゝ宮みや計けいへおはこびおく
廊らうのまへ小樂がく屋やがつらりて持殿ぢでんをたてたり内ない侍しども老おたる
まらりたまらく何ゆらつらりて清せい供くまらるるまらりつらりて樂
どもして清せい戸こひらてまあらるるまをこにらば宮みや司し神かみ人にん
まで物ものをたるはる廳官てんなどをこらち清宮みや内ない侍しども金かね紙し
此こゝ錦にしんをたちてはまくの花はなをつらて大お口くちがまきて天てん樂がくつら
らまるる八はち人にんならびたり天てん人にんのおり何もぐんをかくやとが
おおゆるるの後のちまからる後ごはこなと舞まふ棹とらるるまをこらめ
もんもおよむ次じ中ちゆう累らい夜よおりまらはこよひ御おん通つう夜やある

登一とてあつてたまふ内侍ど母あつて夜も次が湯神
樂あり更さなどに七ふなる小内侍あるに神つらと終て始
倒きふして時中をかりたまひりよ一紙となし内侍ど母が
へて覆ふてぬきいづ湯神樂つらうまづる勢きよ一作せられ
て神主免しい傳はあくのこも母まうはる眼をちやう
ゆいにとうごひをなほ人とありぬづきおはしとゆふひなき
もむくさまく法文などをたて湯神のはづ免てこれあう
あと知れき終ひ一こといとそや次はく人なまご知乃ごを次と
ゆふとなし入さ免しいで作らるること母ありこれを人ま
ら次法算經に壽量品にたび一誦しなる額をかこふけぞ
とゆふことなり或る氣高き女房うし後の障子にうつり
て宝殿に向ひたまはつ次がこ知乃ごとなとや人もあり常ゆ

ありとねがえぬ自ひ神殿のうちちや察ううはしくふなひに
何まごねごきほはまごあひき誠小高唐の神女にかのやうた
わりて帝はゆ免ゆりて朝小雲となり夕小を雨となん
と契りたてまつらんあと母くやとぞねがゆるあまごこに
なりしう湯社の鶏を煮くちうぬととな婦波の音をた
るく瑞籬をちうふははらよや白樂天のうしわれこ急い來く
耳ゆいさうしうりうをまきてい風情母たかみなりなるやとか
あくとりちの茶たる拵くはありと後いひ通一がどしかくて
明よりうば湯取一う整る勢たまふ廿八日こ終さたり浦くご
らんごべしとそ泉郎ども潛れせはせたまふから花田乃
うり此湯なち一唐綾の白丸湯衣二湯大はたてまつ
らせたま婦湯去がしいみづうなま免し一うんえはせれ

まふ浦でひては—まはして湯洗次まことに仙の洞もかくやを
龍宮土をこれをはりやとおぼゆる處にせおわたりみる先
などともある時とはり湯洗—まわりて歸せたまふ辰の
時ふまた湯宮先ぐりありてやがて湯船ふたてまつる島に
うち母れと後く—くはと地あひたり 下畧

○百練抄曰治承四年九月廿一日 新院御幸嚴島第二箇度也云

○古今著聞集曰治承四年九月嚴島小舟幸たり多架湯願文みづ
ら湯草ありて殿下普賢寺殿 清書せし勢たまひたり 希代はるまやか
の湯願文ことに免でたりとれを後日小菴人宮内少輔親經表紙
かきて奉りるとなる條

○同書曰治承元年徳大寺實定大将を望み成就せむつ—ま

へ詣るきよ—んに申小願を立ちける程小十二月廿七日つひ小左
大将小なるとはよりまはつ—まに宿願も頼りてをねえける同三
年三月晦日嚴島小まゐるとて出らばより大納言實國卿中納言
實家卿などをなひ侍るこに自中法門九府もよりたまひた
架より三條大長入道そとに大納言なり六條の左政大長に
申將まで侍りけるもねをけるとをなひやさけり此度はるまや
申將の此島の宝前にて太平樂乃曲舞まはさるるねを—けり案
けるもなり

○源平盛衰記曰徳大寺に實定へ大将弘宗盛小裁らねて大納言
弘辞—申さねて山家の栖小籠居たりなり 中畧 湯身ちうく長つ
ひたまひる侍小佐後兵衛尉近宗と云者あり事小觸てはるく
—此者なりとれを何事も阻なくうちつけ 作合さけりる此近宗

佐藤近宗實定
 卿小巖島請を
 まくむる番

實定公とい後徳大寺大
 臣の侍なり歌不堪能

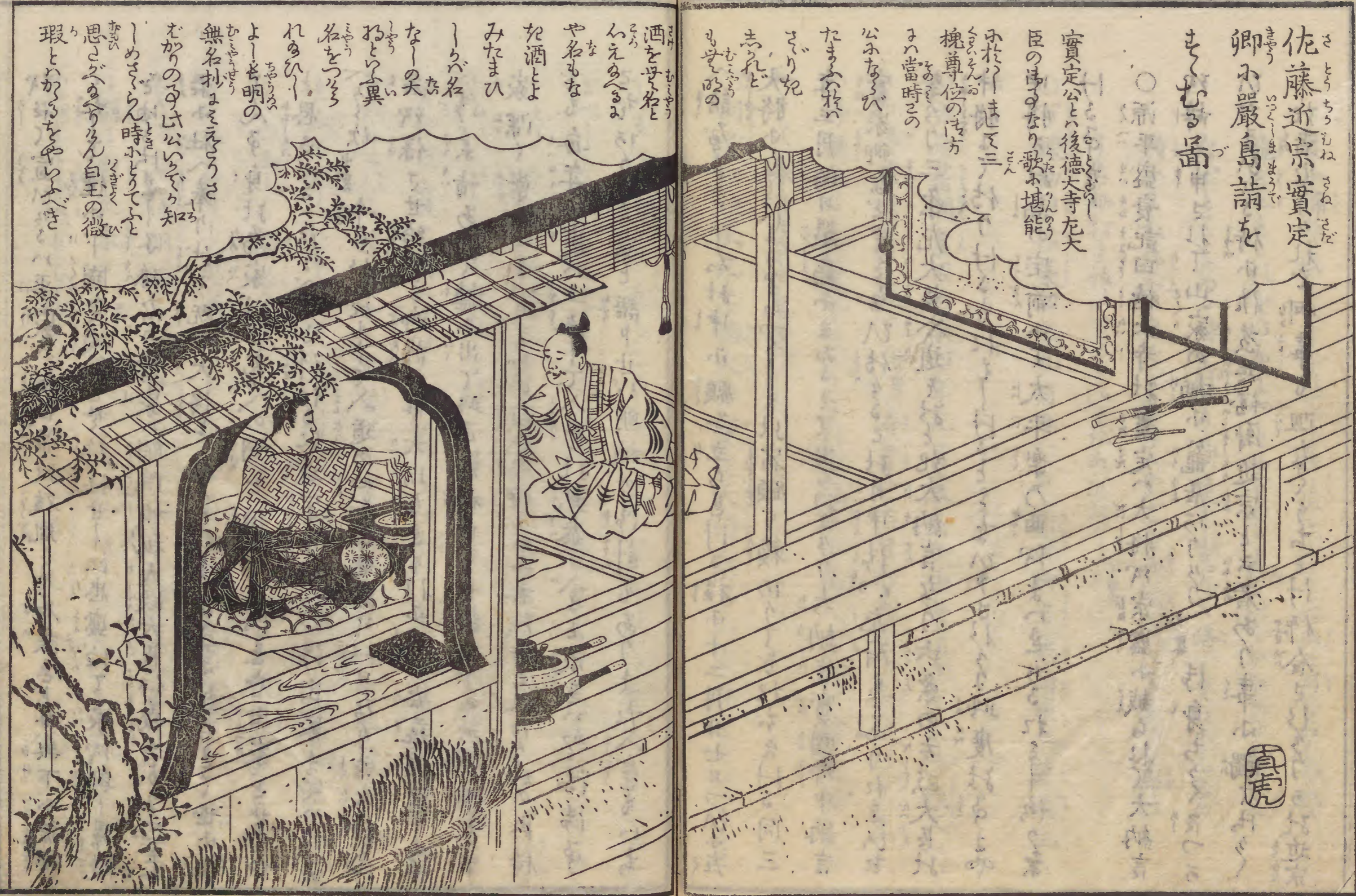
小松のりまて三
 槐尊位の法方

子の當時この
 公おちるび

たまふにた
 さりた

志れど
 もせぬの

酒を母名を
 んえあへるま
 や名もな
 た酒とよ
 みたまひ
 一うへ名
 な一の天
 おとつ異
 名をつら
 れ多ひ
 よ一明の
 無名抄よそ
 むかりのみけい
 一めさらん時
 思とまらん白
 瑕といか



真虎

我^{わが}て宣^{のたま}ひたるハ平^{へい}家^けハ桓^{くわん}武^ぶ帝^{てい}比^ひ後^ご胤^{いん}といハ名^な乗^{のり}まきと母^{はは}無^な下^{した}振^ふ舞^{まひ}
くたして僅^{わずか}下^{した}國^{こく}受^う領^{りやう}以^も持^{もち}任^{にん}せし忠^{ちゆう}盛^{せう}始^{はじめ}て家^{いへ}以^も興^{きやう}一^{いつ}昇^{しやう}殿^{てん}
をゆ^ゆはきし子^こ孫^{そん}なり當^{たう}家^けハ閑^{かん}院^{いん}始^{はじめ}祖^そ大^{だい}政^{せい}大^{だい}長^{ちやう}仁^{にん}義^ぎ公^{こう}より已^{この}来^こ
君^{きみ}小^こ仕^しへ奉^{たたま}り代^{しろ}既^{すで}小^こ大^{だい}將^{しやう}を爲^なりて以^も宗^{しゆん}盛^{せう}小^こ越^こらきて世^よ不^な論^{ろん}
をん可^か身^み比^ひ爲^な家^け以^も免^{めん}人^{にん}の嘲^{あざわらひ}を招^{まね}くべしはまを出家^{しゆつが}をせしや
と思^{おも}ひはるべきと作^なけるに近^{ちか}宗^{しゆん}申^{まを}けるハ出^{しゆ}家^かまでハ行^ゆる
べし中^{ちゆう}畧^{りやく}今^{いま}ハ以^も入^い道^{だう}の心^{こころ}を取^とせ給^{たま}て一^{いつ}日^{にち}なり共^{とも}大^{だい}將^{しやう}は
名^な以^も係^{けい}させ給^{たま}へし御^{おん}計^{けい}は持^{もち}大^{だい}切^{せつ}なまきし小^こ取^とて安^あ養^{やう}は
へ清^{せい}系^{けい}情^{じやう}ありて聽^か小^こ出^いて此^{この}事^{こと}以^も祈^{いのり}申^{まを}させ給^{たま}へしハ明^{めい}神^{しん}をハ平^{へい}
家^け深^{ふか}く崇^{あが}めてまつりて持^{もち}の社^{やしろ}小^こ内^{ない}侍^しといふ者^{もの}以^も居^ゐられたりかの内^{ない}侍^し
ども毎^{まい}年^{ねん}一^{いつ}度^{たび}ハ上^う洛^{らく}して入^いさし見^{けん}叅^{さん}小^こ入^いると承^{うけ}まハか清^{せい}系^{けい}子^こ
こぞ行^ゆりしなど語^{かた}中^{ちゆう}せば明^{めい}神^{しん}の御^{おん}計^{けい}もありまた入^いさしもち

卜^うる人^{ひと}以^もて思^{おも}直^{ちゆう}はるも行^ゆりなんと申^{まを}けしハ近^{ちか}宗^{しゆん}ハはるは然^{しか}
るべしとてやがて清^{せい}系^{けい}進^{しん}行^ゆりて嚴^{いん}島^{しま}へまゐり給^{たま}ふハ月^{げつ}二^に日^{にち}いつ
し後^ごは着^つ給^{たま}ふ神^{かみ}前^{まへ}小^こまゐりて社^{やしろ}頭^{かぶ}の景^{けい}系^{けい}持^{もち}したまハ皓^{かう}潔^{けつ}
たる波^{なみ}月^{げつ}ハ和^わ光^{こう}の影^{かげ}を誨^{あそ}ひ蒼^{そう}茫^{まう}たる水^{みづ}雲^{うん}ハ利^り物^{ぶつ}の風^{かぜ}を帯^{おび}たり
雲^{うん}の楣^{めい}霞^かの軒^{のき}ハくばくハ年^{とし}へむ玉^{たま}比^ひ簾^{れん}錦^{きん}の帳^{ちやう}たのみを舞^まて
日^ひ以^もおくり遠^{えん}國^{こく}小^こも眺^{なが}望^{ぼう}はしき名^な取^とて神^{かみ}明^{めい}地^ちを點^{てん}し跡^{あと}をた
ま人を利^りしたまふこ持^{もち}たをけし肩^{かた}以^もさし袖^{そで}をつる内^{ない}侍^しも結^{むす}縁^{えん}
うやましく清^{せい}系^{けい}をまは信^{しん}をいし歩^{あゆ}以^も願^{ねん}望^{ぼう}もまゐたもの
しく持^{もち}おくり免^{めん}以^も清^{せい}系^{けい}籠^{かご}ハ七^{しち}箇^か目^めなり其^{その}間^ま内^{ない}侍^しとも常^{じやう}小^こま
ゐりて今^{いま}様^{やう}朗^{らう}詠^いし琴^{こと}瑟^{せき}彈^ひなどし旅^{たび}の清^{せい}系^{けい}はまき情^{じやう}ハ
る體^{たい}ハ慰^{なぐさ}免^{めん}奉^{たたま}る中^{ちゆう}畧^{りやく}七^{しち}過^かぬまは都^{みやこ}へ歸^{かへ}り給^{たま}ふ内^{ない}侍^しとも一^{いつ}夜^や
の泊^{とまり}まで清^{せい}系^{けい}申^{まを}て其^{その}夜^よハ殊^{こと}小^こ餘^{あま}波^{なみ}以^も惜^{おし}し奉^{たたま}り明^{めい}ぬまハ暇^{いさま}申^{まを}ける以^も

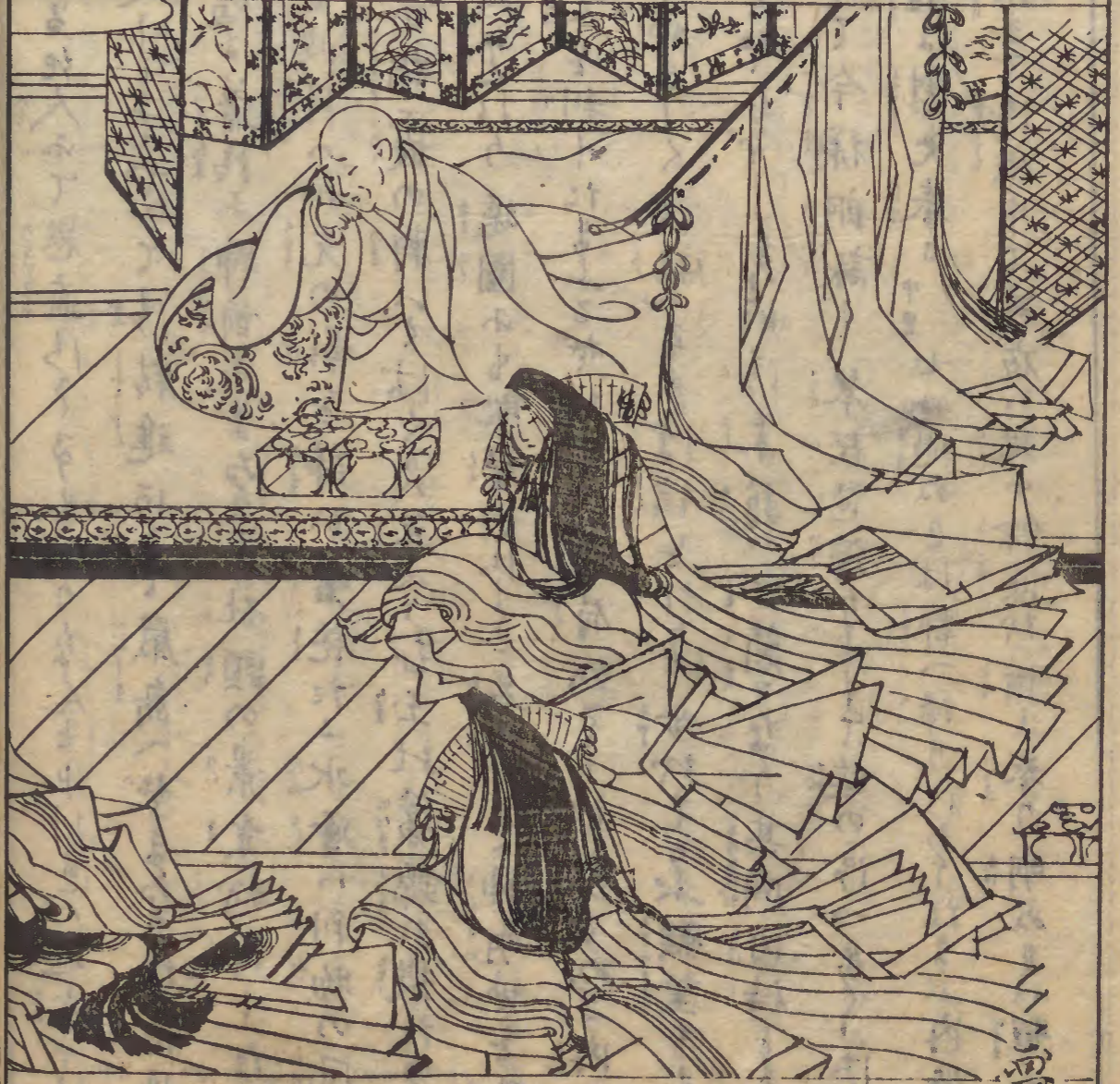
西八條殿

内侍

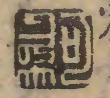
清盛公

對面の圖

世の画工乃公
を面くた
行杯の迹よ
りまこの面
目を知さる
が故に眼をい
うしは漢松
なく肥ちり
たる顔み

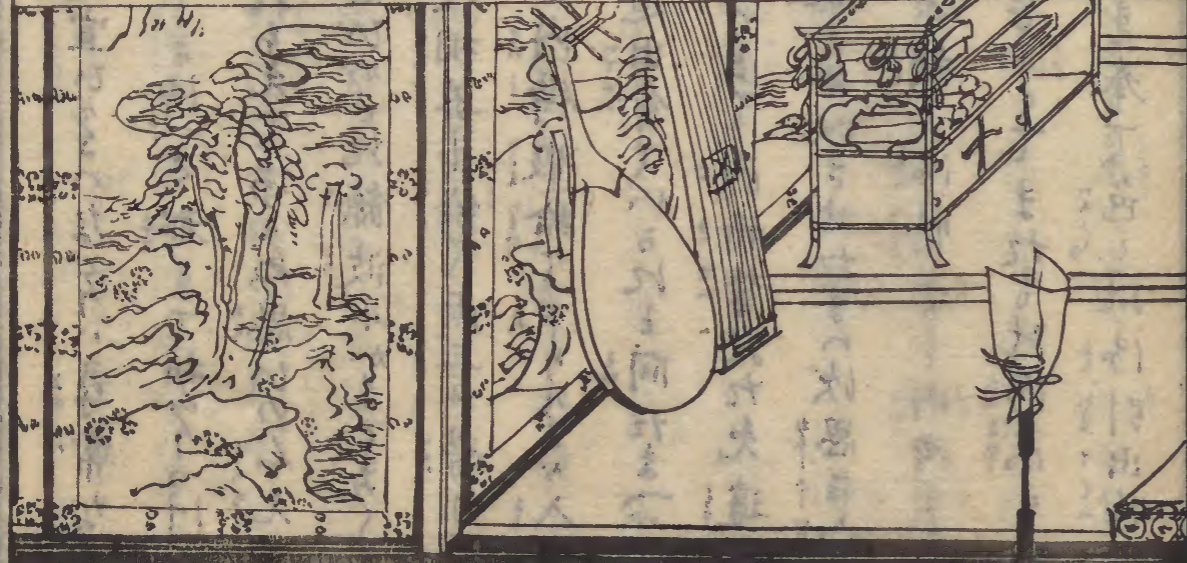


西八條殿
清盛公
内侍



つらつてこい
面りるとい
たくるせの
より子載の
一人の人た
肖ちるとい
ると細はと
ん然いあれ

この像はた
る此画巻の遺
よつて描写
ものをれい
うとい人も
んう程伊川
今人以影
聖不相似
是別人と
ことを思
かんの
はさむひ



實定宣ひるはなごりハ尋常なりといひながらこれハ理も過たり何
は苦しいは(き)都までおろしつけたま(う)りまたもとれも見泰もい
う(と)れちえて(う)ぬ思ひのんえなむと作られ(る)内侍どもは(う)務
たふ忍びが(と)れ餘波(り)かくこまくと宣ひ(ら)れ都まで(と)送り奉(る)徳
大寺へ相具(し)給て(ら)三日(り)て様(う)と(な)り引出物(を)たま(り)ける
は(て)母内侍(に)暇(を)給て(ら)下(り)る(が)入道(の)見泰(よ)入(り)とて西(の)八條(へ)登(り)奉(る)
入道(の)出會(ひ)て(ら)いと問(ひ)たま(へ)徳(の)大寺(に)大納言(殿)今度(の)大將(に)漏(れ)
せ給(へ)りと(し)湯(を)祈(り)誓(ひ)た免(れ)違(は)と(し)嚴島(に)湯(を)籠(り)七箇(日)尋常(に)人
乃(ち)社(に)参(り)母(に)お(と)させたま(へ)次(に)思(ひ)入(り)たる御(の)有(り)様(も)尊(く)見(え)は(せ)たま(り)
上(の)事(に)觸(れ)て湯(を)情(を)か(り)内侍(に)ご(と)に不便(な)あり奉(る)後(に)つき(に)か(り)湯(を)
好(む)波(を)く(り)てまたも(ち)湯(を)糸(も)糸(も)ぬ(れ)む都(に)まで(ち)お(ろ)し付(け)たま(へ)松(を)
相(あ)勞(を)奉(り)て色(を)此(に)湯(を)引出物(を)たま(り)て下(り)侍(に)い(ら)でかくと申(入)
は(る)べきとて糸(を)て(ら)と申(せ)入(り)さ(も)とあり(ち)し(る)人(に)承(り)て湯(を)を
ら(く)と流(し)たま(へ)り(を)く(り)て宣(ひ)る(は)近衛(の)大將(に)家(に)前途(なり)
歎(か)たま(も)理(なり)夫(れ)小(の)都(の)内(に)靈(の)佛(靈)社(に)其(の)教(を)お(ろ)し湯(を)望(み)此(に)佛
神(を)は(り)お(ろ)して西(の)海(は)る(り)に漕(り)下(り)浄(の)海(が)深(く)崇(め)た(み)奉(る)嚴(の)島
まで糸(を)請(せ)る(る)こ(と)惜(し)き明(の)神(の)湯(を)照(り)覽(測)が(り)其(の)上(に)今(度)
ハ理(運)なり(に)入(り)道(が)計(り)て宗(盛)が(り)奉(り)し申(す)に(と)計(り)申(す)
とて(ち)か(り)を泣(か)たま(へ)り内侍(ども)詭(を)引出物(を)なんど給(り)て下(り)は(せ)たり
其(の)後(や)が(て)重(盛)の(ち)お(ろ)し(り)て(ち)辞(り)て右(の)ふ(り)一(に)實(定)に(と)奉(り)
一(に)申(す)て(ち)大將(に)成(り)奉(る)いつ(に)同(じ)き五月(の)八日(に)湯(を)悦(び)申(す)あり(ち)今日
佐(と)兵(衛)近(衛)宗(盛)の(ち)衛(門)尉(に)な(り)上(の)但(馬)國(本)に(ち)崎(と)い(ふ)大(庄)を
賜(り)神(明)忽(ち)湯(を)納(り)受(り)尊(に)不(付)ても(ち)近(宗)が(り)多(く)神(妙)と(ち)お(ろ)
が(り)け(り)

按(ず)小(の)實(定)の(ち)滋(高)請(の)こ(と)昔(の)聞(集)に(ち)願(を)て(ち)治(承)元(年)大將(に)侍(せ)り(れ)同(じ)に(ち)三
年(の)泰(請)あり(と)こ(と)一(に)本(段)盛(衰)記(に)及(び)平(家)物語(の)平(載)と(ち)願(を)奉(請)の(ち)先(後)あり

いづれよりあらん見ん人
そよたよーたふ

○山槐記曰治承三年六月七日前大相國花山院令詣安菟伊都岐

島給自一昨日御精進但魚味不憚也丹波守行雅侍從兼經藏人

大夫恭房判官信民部大夫政清監物康識左衛門尉信直右馬

允高清令著結衣給云々出彼經供養并内侍等給物料也

卅石可忤替仍欲泰内之屬右少弁光雅令史示遂四無申旨者

仍延引泰内云々廿二日令還向給云々

鹿苑院殿嚴島詣記

源貞世作

尤たけわのいまらちきみいつらいはまうではことらり 中畧むらい母嚴

島は高倉院清幸なり平はわいまらち君もたびくまらうて

らまい例も侍らめど母とおびひきらつくをづらい地清姿ど

もひて花田色小目結と多らいふもんを深て袖口をそく裾ひ

ろ紀うちらけとのやも結をねない次がこに着たまひ赤紀おひ

小青色は脛巾赤色はこら紀袴なり清供の人々みなさとさ

紀おりなる金がこなもけせらる康應元年三月四日夜ふ

うく都をいでとせ給ふ地日の年の時はりに根津の坐は兵

庫の津小つう勢たまひ勢清座は舟小系るべき人らうねては

ためらる

修理大夫

右京大夫

田野舟

畠山允近大夫將監

同七郎

今川修理亮

ま下

畠山十郎

こはわらいおのしの舟小てまわり侍り

畠山清の佐

山名播磨守

細川波路守

探頭伊豫入道

同右清門佐

伊勢清門入道

朝倉因幡守

古山珠阿

士佛

土岐伊豫守

今川越後入道

同中勢右輔

曾我員濃入道

若王寺別當

松壽丸

九日俵波の尾尾とやふと後のよりけり
ち此島などいふ浦くわあてりて足申
籠へへる侍りと地とあり侍り
の三島はるりけり今夜の安統の
小舟船をうけり十日またこたおさせたまふ三津風早やま

地内の海神代日長久礼畑見の海川の迫つう屋う此浦く
させたまひねんど乃迫つといふ瀧の如く潮をやく狭地と
こ後なり船ともかへるさいと手もたゆぐこがたり
ふな玉おぬさも取あへる早地波瀬をききふる哉
豊崎などかへりける程おまた夜小入て子此時をかりよいつく
一海小着を給ふ此社のうへ後小黒本此波旅ををつくはる今
夜の舟にまねとほりたる人も多るべし十一日此社かへり
がませ給て清前の淡地も居れわとりよ祭かごふて舟船小
うつとを給り清社の廊々拜殿などに巫内侍やう此神司
女と母たちこたりかも来れむらかき居たるにいとよく似たり緒
方とく屋いふわねた此川とて安藤と周防のはる此川乃
ま急の海づつとて周防のまけりちに密積たといふまきり

見申屋代の島伊豫此國そ前此山など南ふあこりてかきみ
つ波のうへもうちりたり夜船へる後もとなる船小

とて神代より海上小舟とありたり 下畧

○源貞世今川了俊道行あり白長月廿日いつくし海まきりて侍る此

島ハ峯三にむかりけび元何りて深山木此年ありたるうちにま
索て老たる松の岩けり一小生かきよきつ磯際まで志ありたりかの
清社の屋うへもこ一戌亥小むひたり廊下まで潮うち入たりも
居ハ海の中小たてり島の四方小入江と母もまたありて見廻りたりな
侍るなり百浦侍るとぞまう次あそれん家もて此ありて此地を
つやふとち見侍るまうばとまづ都此友も故のねやもこひく侍
るな孫山瀧本などいふ所此浦を母日とまぬべいとて以てかき
一げよけりあそれりねどに足むなり此地はて海より侍りて清社をま

こ地いで佛舍利東大寺兼室海小入たてまつりぬけ度の祈なるべ一夕日小む

らひてこ地こころをどいく一侍り向て船おそく侍るハ磯際のぬるみ
かけて侍り一など船子ども此ゆか城などてかくいふぞとたづね侍り
一うばかやうに潮のみちひの早起時ハ磯際の潮のはりさまに流侍る
どに船のこ地よく侍るなりぬるみとまよど此申次といふ

いそ際ぬるみふけて出り母れをやく一侍りちむくむなは

け浦ハ四方小山くうちかさなりていつく潮のみちひも通せんとなおゆる
海中小こ此島も侍るなりたり誠小海の都此あるど此侍生ふとわえ
てこ此世の中とも見え侍るけりてまはまき後でねおえ 下畧

○豊鑑曰秀吉公中園経て名護屋小おむきたまふ安藝の廣島ハ
毛利住不なれば一日二日をほろひたまふ近々礼をいつくし海へ詣たまふ清社
ハ小むらひ海を望み廻廊舞殿など潮干がこ此白砂よ作りぬるし

豊臣太閤清社参の圖

逸史曰文禄元年四月太閤抵筑
造嚴島祠駐師禱之令左右取錢
緡祝曰投而多面以得志矣揮手

一擲每錢皆

紅師衆相傳觀呼

隨納錢于神

粘合二錢作

大閤大喜

庫蓋預

西字云

逸史氏曰

豐公似

饒秋書

故智然

公之不學

冊上

有是

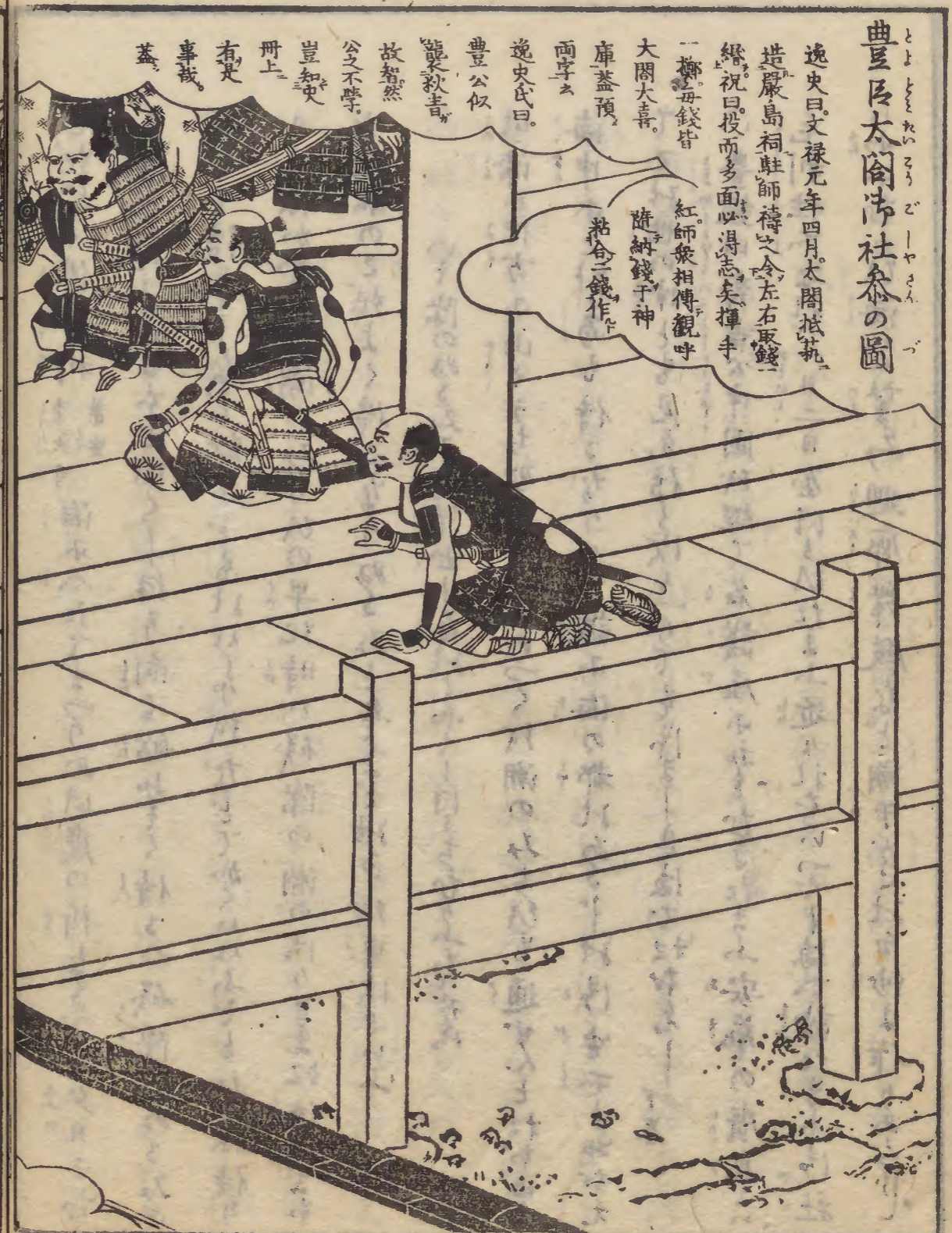
事哉

蓋



英雄一時機鋒偶然有暗合焉爾
亦可以為一奇矣。と有り逸史云
中井積善の著したる書にあり
この中井徳編年集成にあり

真虎



けきハ潮のみち来る枕うらハ板敷此ひたる布どにけしこみよ波よけま
わたる波の中をせありく如くなる替の粧ひひかりねろにたりぬべ

○正應五年八月十日奉納和歌

海邊霞

権中納言為世

なまはぶと波いねるぬ漢去此栲をうけてたつあうな

梅風

権中納言為方

母と見しふ花もやうみ自ひん春やむり此梅のた風

春曉月

権中納言俊定

りやうでをりせちる宛月けの如きみふくも春の明仄

雲間花

後二位隆精

月いつるみねのそる此あがに色見えやる山様う那

岸山吹

法眼玄兼

昔うはきけはけしふかりまて波と次巻ふはるやま吹

関子規

左近衛中将為首

志はしとてそ急如もと先よ子紀なむ向る角次麻を此雲

浦五月雨

入道中納言公雄

ま袖む次隙をせなり礼はま衣うらかきくもははししの色

芦間堂

後三位兼行

野沢なるり此葉末分く風小見まをえはけり堂らな

初秋風

後三位重經

たうるともちていつらぬ秋風ふもよるはまぬるにが波外

露知秋

右近衛中将實躬

いまよ露の露るむらりみ字葉よ母らぬ徒のなまもる人

近鹿

前権僧正良覚

舟小むね軒端の山のけりて舟小後つる鳥けり麻の声

月前舟

修理を夫實時

をそしはや浪踏もるか舟をむく舟人よは漕くなり

杜紅葉

前関自家一條

うりゆくくの森の構もぞくわどれ色の足えけり

夜時雨

津守國助

しほゆたひよまをれやちて舟かむるよはの山風

浦子鳥

大藏卿

むもれたよよ来れなみり月けむるに浦こなり

雪中松

尤馬頭定成

しほきて嵐もけもかぬのねろくちなるはのしゆけ

山路嵐

少納言季長

梅が香切やぶらの末小吹かきあじや花のさなる草

旅泊夢

沙弥明覚

ちうらぬ浪のうたぬのとなり船差踏するに都をぞんる

寄衣意

右近衛少将隆教

うわねなごつはのなまはけかへたての中は衣子

寄玉意

侍従為守

軒端よりこわく雨のしむもけかある色やしゆん

寄書意

玄輝門院少将

おもいねたよもかき一葉の葉は風につてなるつゆの玉つさ

寄舟意

新院新大納言

松まじ渚小よる泉郎小舟みる承もかきて漕くしとや

寄貝意

右近衛中将親平

西行法師八名地旧跡を歴遊して
 此島へも来り月とて詠哥の感
 慨あり——と山家集に見えり
 哥八本文よのぞ



うたてはたよ波のうせ貝んくこけてなちやうらみむ

浦鶴

散位親範

うけこちる浦の月此あはの小松風さむくたつも啼なり

磯鷗

寂慈法師

なほはねやいその松をこゑくれて海さたのかみ来波はなご

夕迹懐

右近将中将为實

理もろろむちり地月日たをれて夕こといも此かゆん

曉懐旧

右近将監政秋

はてもはれむうらいつもこそれねと寐覚をちか限る

壽量岳

沙門羅覚

せ来てなちたもさよりけいつもあはよりしつる今なりり

普門岳

藤原仲光女

ねよふ(ま)かきり母ありしゆき江ふかつて母たてし誓ね

玄佛本願丸

漸定

花の名をそしめても夕はの光いあがのりさぞまじらふ

社頭花

祢宜鴨祐治

しるぬのいろはねてさく花小ゆふ斗もあつた光のうらみ

社頭月

明玄

まもゆきさけたのあはらま神も月よいてにみまむ

社頭祝

後三位經寄

せえて母かまもゆきさけつらま浪のかふ母風をねんま

山家集

安藤のくれば一宮(ま)ありけるわたるとみの浦といふ處ふて風ふ

この散位茶系親の宿願より奉納せしところなりてなもつぐまいたい
まやうしん(ん)ぢうのそまうか(な)せせせしませといふ三十三字(冠)といふ
よめる歌どもよなん筆者(茶系)經名(り)少納言(長)つねり其文(煩)いといふ累せり

きとられて禮へれを苦ふきたるいかりより月れよりそねえて

浪の音かふらけてらふに却苦もゆ月のけをなとて 西行

まう侍つきて月いとらうてあそれおかえり礼を

も後ともに様なる愛も月も出てはめやかげのらもれあは 日

凡雅集

九月十二日の夜いつは(あ)かりらる中候返の鞠といふ處ふて海辺
の月といわとて

九段日記

あこら夜の月が独りなるもみぬ候ふ浪まうして 茶系公重
そけより葦島ちくくちりて社頭を足るに鳥居はうみのねもて二町

なかりとおわしとて立ち廻廊も柱いとな潮中つらりてありふね

より入て

遠く島の下は黒根の冬より波のうらよなつらとせえり 玄青法師

これらかかきて南島官司相守左近将監方つらりらるとかくら

りて月小なり侍きい立出てふん休まて見ま汝干しおみち眼のま
へみありて河子三崎をかりも城ち方おなりぬつしおいた大海の
いづれ哉と宗祇賢伝なりこそりなる那 下果

とま月と日いづれ休まて

と次しお母光をもつて高の志此宮居よし紀ま此の月 似中法沙
同夜月と殿の百八燈を灯ごてまつりて

とと後うたの末居もうかやうと見えつちなる浪のとも火 日

登もろろひるもたき宮後の神ふら角城もがも該人 申納言持豊

たつこと葉

僧海量

かけまく母あ屋おがそく言巻も何な小持しは伊都伎しま
兼此しづまりいま次なる安養の海いつきし後の大宮此よまひと
母しづ波のうちそり次淡辺ちつくや糸のまおみひららら

よしちつ岩根に宮柱おとしはたて高天原小十本たく瑞の
大くいらら神さびたてりねおん侍おのうてなひるく免ごうはそ殿
長くつちなり堅小横おたら揚うちけしけうごし右よ左小
石植玉かたひきまごりかなごこちなごたうお山ひとき侍つたごと
乃くおはまく残る隙なく大床の下までうしわ此満来るは
ま世おたらひなく免でつし月かげ燈のひりり波おうつら
ひ空おかよひんのちり母拂ひつしづきの世のちり人の
免ではし免らんみちのく此松島たよはのそれ後なる天の橋
立こ此いつきしまこれうつを世おひでたる名をそしはとと後ちり
と人ごとと言施かろうつぐ免り然いあなれとまが皇國のひろき
かきもかきおぬきしは處く山のたうお河の大蛇野のひ
ろき原のふらき島のそらちるる谷の八十隈免ぐらる巖此

けもくもびへたる石の奇くあやまきある神の古佛乃
庭の静々しずかと静々しずかくまごいをひらに小蛇こへびのこごりけたる
まひ一うとたなげあふいとちかく扱あつかわらうなるちるの柱はしらくし
くゆさなるちるへうるはく長采ながさいなるちるの清きよらみこま
やうなるそれうちむうゆんゆんちをいさく次つぎをさう一ひとらの時の
つりうはるけりふれ時とき小一たがひ糸いとづ繋つなぎるれ異ことなる小ま
た人ひとごとによいとふこともそ後のちくの園ゆらうはまいたまの
人うそれちぎ菜さい城じやう定ぢやうむむき一うのちまごまごおのもくいとも
いとも先まへでおもつるそ紙こ言げん拳けんままうはまあはま今いまこ
そ後のちもいさむれ六十むそあまりれくぬちを廻めぐりるにうちんる
小眼こまなをよろこはし米こめんをなぐはまむさふまこと世よ小た
ふひあじとたもつる布ふ自じれ高根たかねあふれうと紀きの園くの徳とく

野のなる那智なち龍りゆうなる榮えいななうまぐねとゆ小阿波おあのな
るをれ盡はらなるいまむひ吉野よしののはられ長采ながさいなるよおひ
たたなるといとも多おほく乃な園く中ちゆう小せうぎのたふひな一といふ一
うはやいとまれうく海うみき今いまこのはつき一まれ世よ小ひでたる
こと紙かみあふらほ松島まつしまは一立たて巖いわ島の三さん初はつの城じやうとくゆ
たよ奇あやしく怪あやしくきたたひ小あは次つぎ清きよくこはやうにうたひ
しくれとちるかこ小一て其地そのちをゆと兔うさぎ足あしかう足あし継つぎ個こふ
縁ゆかりけき名なそか一と漕こ充みぐり眼まなこかよろこばし米こめ外そとなく
はま一むるに世よ小秀ひでたりと米こめ外そとをわさんことうべなるは
て三さんつの内うちたがひ小をれちりくそ異ことなまむづきたり
まはりのあふれとれと松まつ一まは一立たて浦うら急いそ島しま回まわり
此こたふるとそ後のちなれよあは此こ一まれふそれもと大床おほしゆ

乃下までうー木の満来るよをひまことに世ふたぐひなき
名はしるはなかりと本でもやまはここのやうとよみ
しついで

宮柱ふとくたてりては波のなちる島そこは島

もつて神の宮もいなかりもつてまのやまは瑞籬

みつと紀小もちる波とも火はけがうつはる紀ふふ

朝ふたの足まど母あは次神風のついではひよほる浪

安産のうみつき一海根の動なくはるも元ゆなきおは

安産のついで

うーはいつく大海のいつく那

ね木海のついでの細江や朝がはみ

宗祇
紹巴

みつと糸に月よりうー乃宮居う那

亀おう一乃をまらかそ免るねまつと糸

満し糸にうらやと糸花の屋ま

なまや月うげつひりいつく一海

此余大海或陸の處高き向とりや連歌あり
張徳太平記に載たりそに八景は

宮下はや燈籠の火にあけををし

燈籠やいつく海を糸なみの花

み屋を島屋廻廊亦夜のつちやれき

松の雪うみも彩をやつく一ま

とーにたついつく一ま根のよつ乃麻

梅が雪や眠る次一乃宿直祢直

まが恵方おわーまア海いつく島

宗長
玄仍
遊行
松梅院
其角
美濃
史考
伊勢
涼菟
浪
重瀨
難波
冷く
野坡
浪
関更

林
野
歌

田清

やの

の

光久

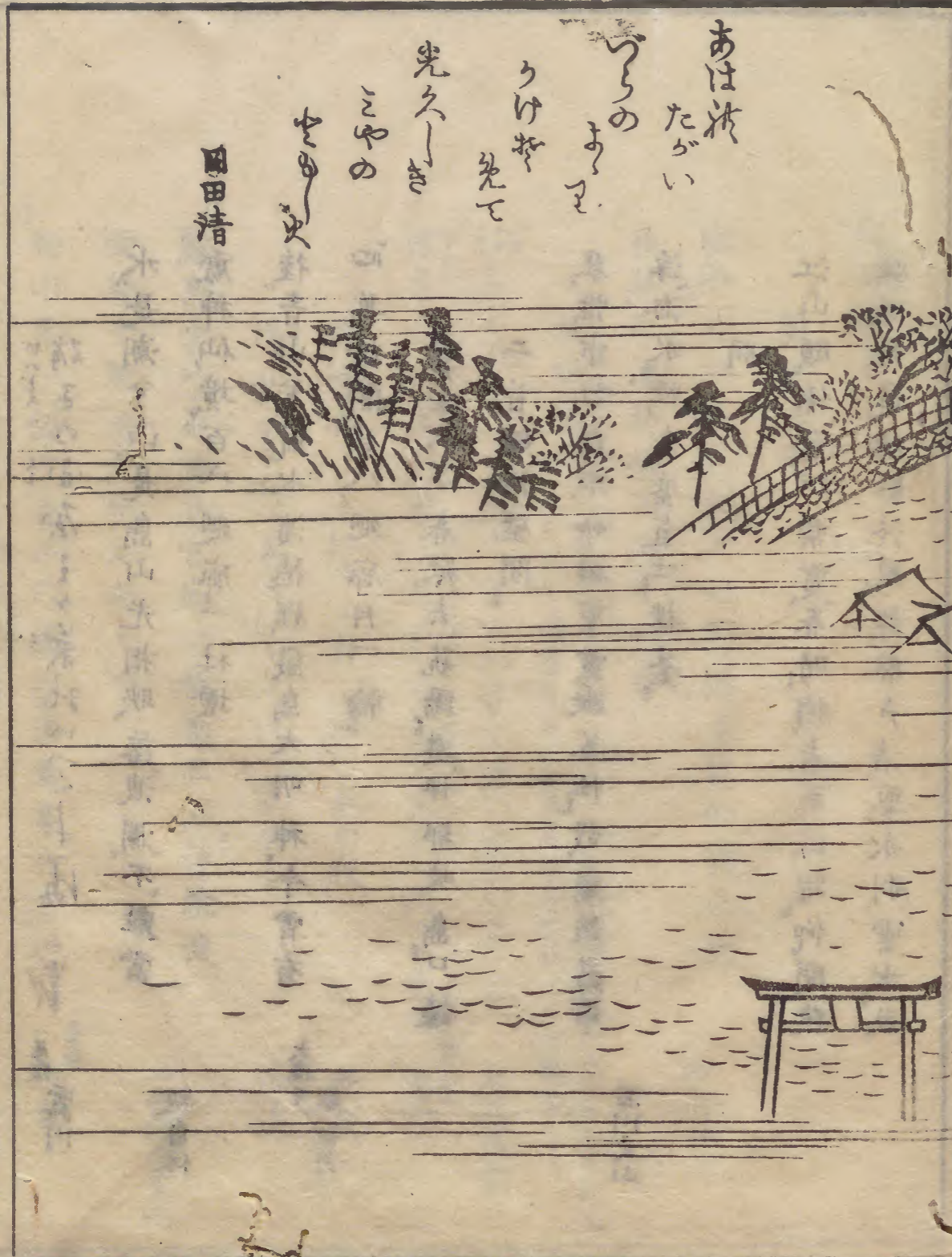
光て

うけ

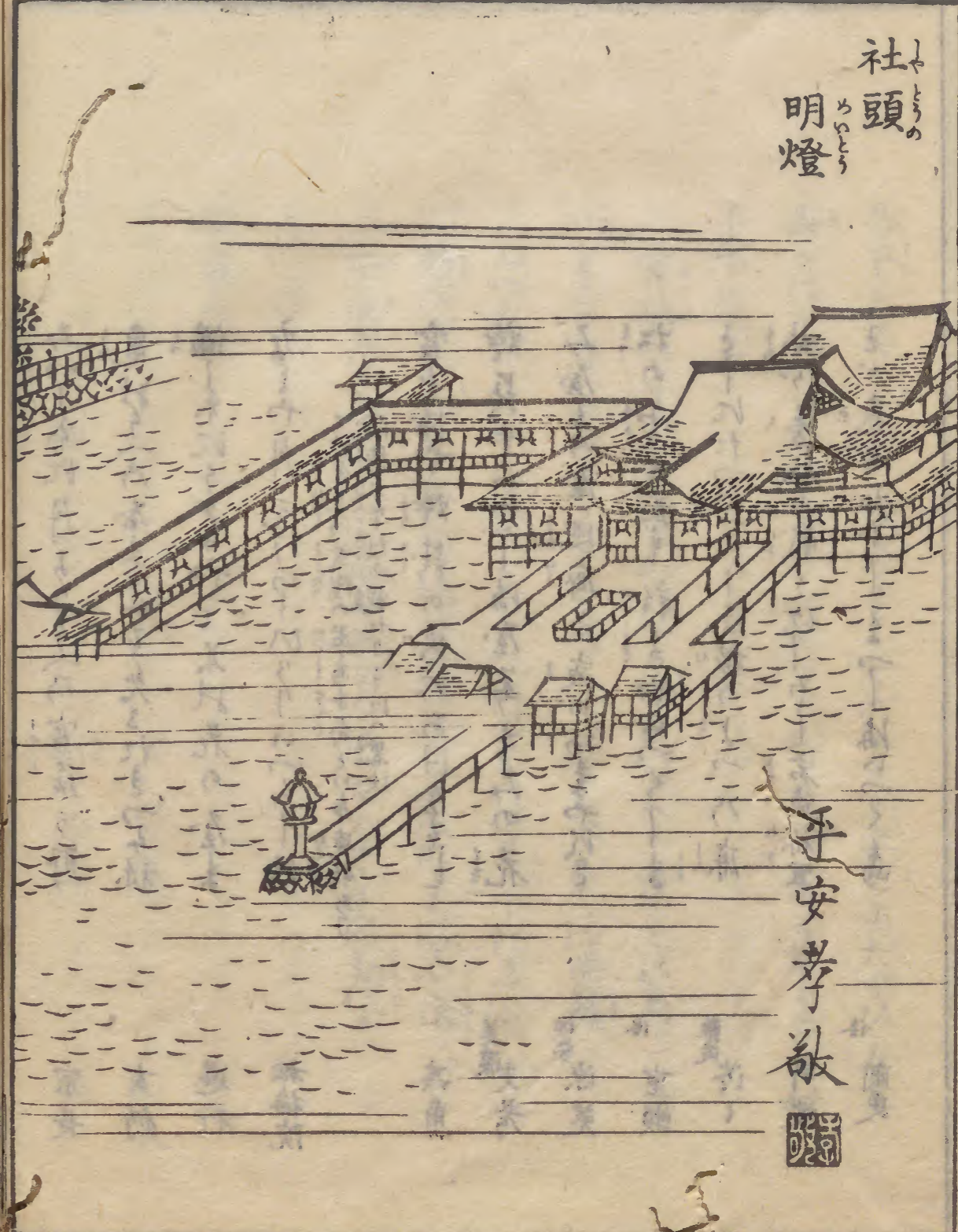
あま

たがい

あは



社頭
明燈



平安孝敬



硝子の玉屋より葉北のてし海

尾張 露川

水是潮兮山是島山光相映落波瀾不離當

秋自休

處神仙境百八廻廊一社壇

後青山兮前水濱德輝嚴島大明神今宵有

大徳寺 秋江月

心萬燈闇百八廻廊月一輪

寛永丙子春欲去菟陽遊伊都岐島口讓

二首題榜壁間

恭惟市杵島姬命神聖靈蹤益壯哉廟貌巋然

石川文山

浮海水怪看蜃氣吐樓臺

同

江山頗係念行樂賞春晴俯看魚龍躍仰聞猿

鶴鳴月昇燈影淡風靜磬声清要永別雲水田

詩記姓名

嚴島海雲

市杵姫祠名久聞大師懇禱意慇懃誰分蓬

向陽林子

島移西海神德添輝五色雲

社頭明燈

八景乃一〇八景ハイもゆる社頭明燈大元櫻花瀧宮水堂鏡池
秋月御笠濱暮雪谷原蘆鹿有浦客船弥山神鴉等なり

波を波小うつる舟ねぞんこけ官はのよ乃ともく火

正三位通躬

波るより足きてねあると舟火の宮居も志はしいつくま山

宣阿

明燈やことにくちたはく火の夜

野坡

浮燈をちみむばうはつきをそ

風津

嚴島雲暗飛繡堯官廊壯觀壓西瀛神燈波

二品親王亮延

面幾千點添着和光夜々明

好山朶々鏡中看百尺樓臺海氣寒夜有神

黄檗 悦峯

嚴島圖會卷之終

燈光映波却疑星斗落欄干
鴉定鶴棲欽夕陽紅燈百八點長廊夜潮推
逆万波色天女介來無盡光

僧獨麟



市井繁華入開大明懸新喜舊情銀冷

氣清

僧獨麟

